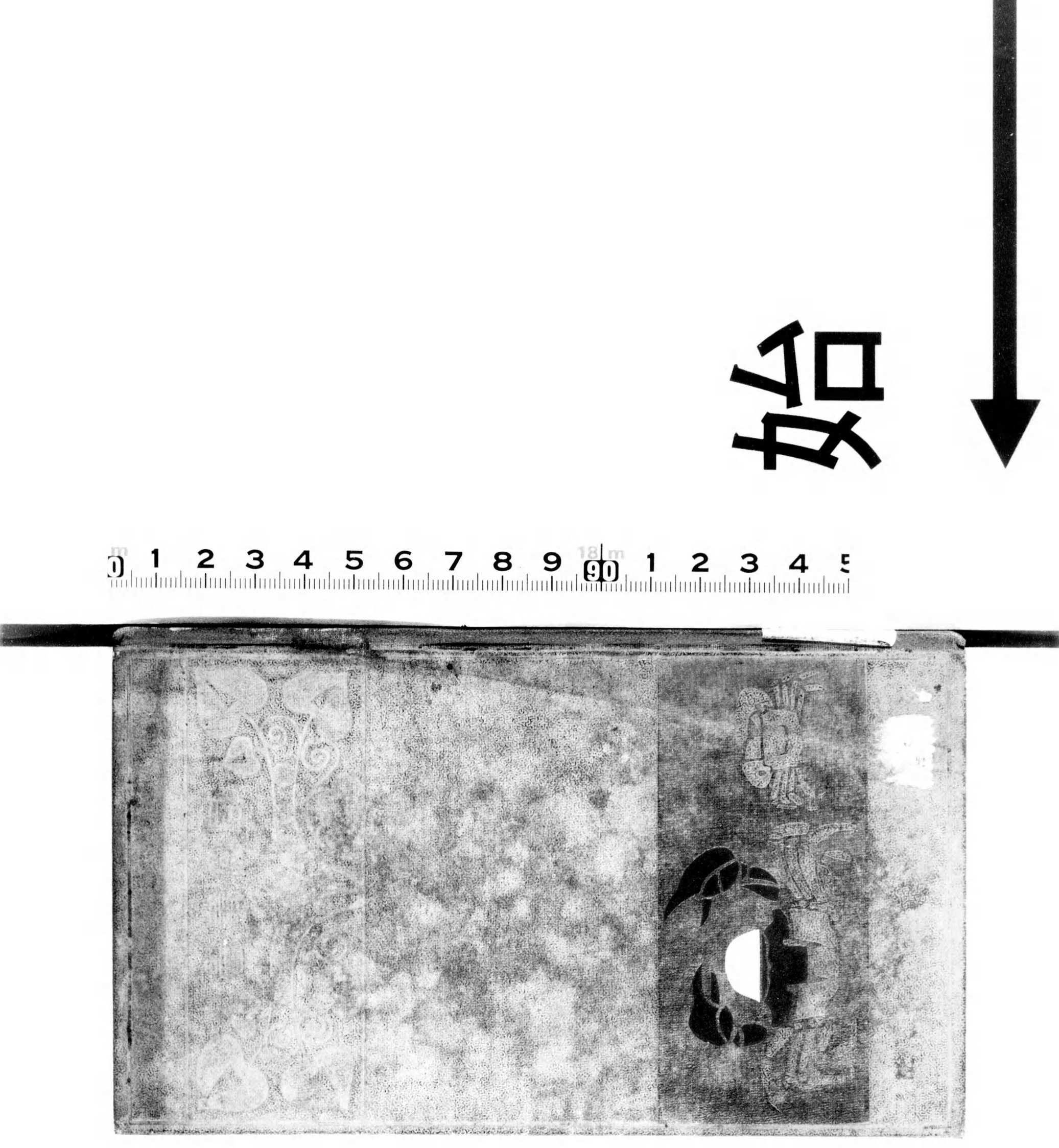
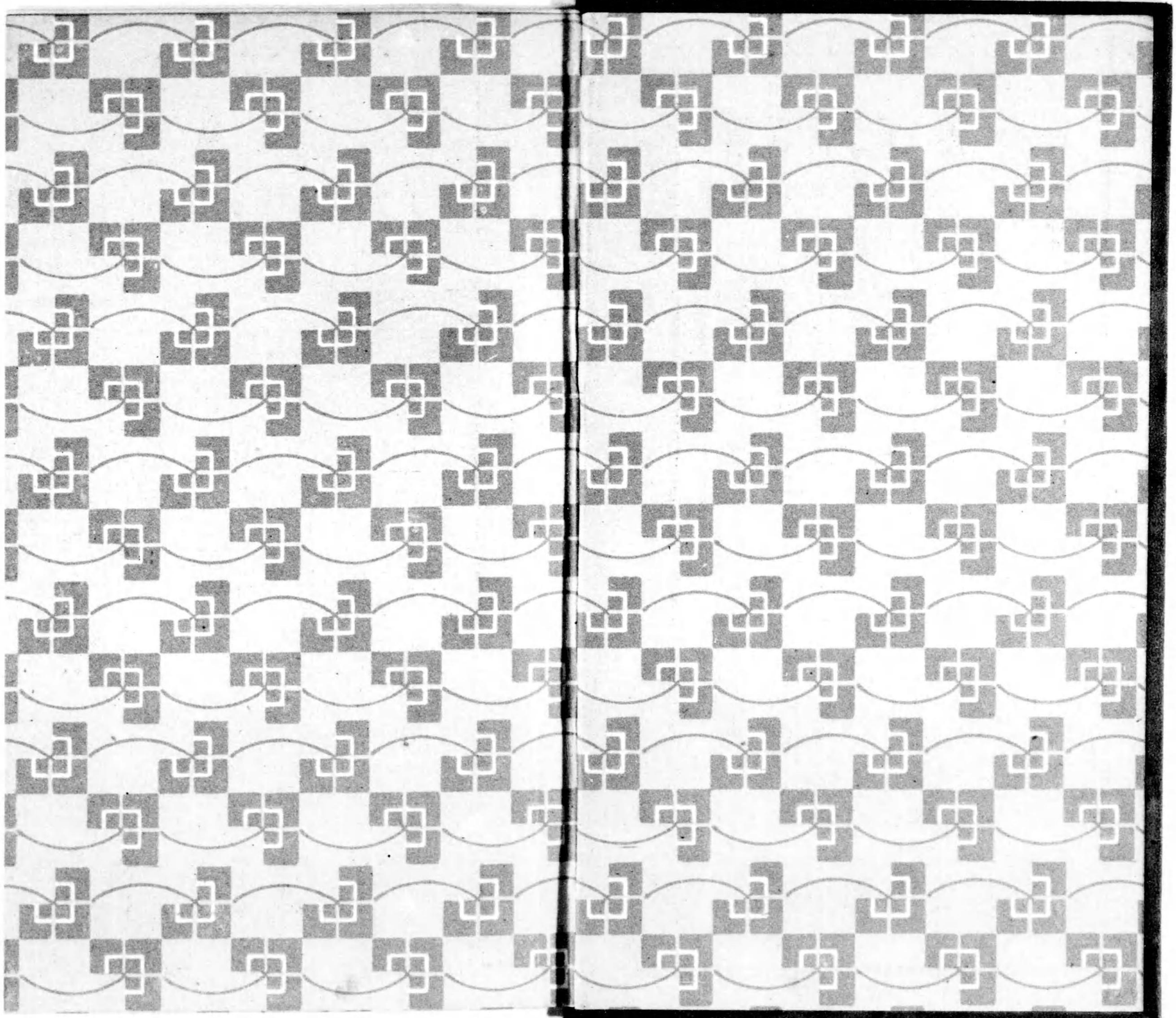

祭
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5



同文叢書　發行の辭

書籍は文化の産物として最も重要なるもの〻一である。隨つて最良の書籍を最低の價を以て最も廣く行渡らしむることは、文化に貢獻する最も有力なる手段であつて、又我々出版業者の理想とする所でなければならぬ。今回小館の企てる同文叢書はこの理想を實現する一端である。卽ち獻米諸國に見るキヤツセル・レクラム・インターナショナルライブラリー・ホームユニヴーシチーライブラリー等の趣旨に倣ひ、本館發行圖書の中永久的價値あるものを拔いて之を縮刷し、可能なる最低價を以て之を讀者に提供せんとするのである。若し之にして聊たりとも我が邦文化に貢獻することが出來たならば、發行者の望は卽ち足りる。因みに本叢書は一學科に偏せず、編次を逐はず、五十卷百卷に至るまで逐次之を公にする筈である。

大正二年七月

發行者識

大正
2. 8. 6
内交

特106
405

我子の惡德

大村仁太郎編述

縮刷

東京 株式會社 同文館藏版

序

本書は、惡德養成法一名蟹の横這ひ（Krebsbuechlein oder Anweisung zu einer unvernuenftigen Erziehung der Kinder）なる標題を以て、今を距る百二十三年、始めて世に公にせられたるザルツマン氏（Gotthilf Salzmann）の著書を基礎として編述せるものなり。ザルツマン氏、嘗てエールフールト府に在るの際、上下諸種の家庭に出入し、親しく兒童教育の等閑に附せらるゝを見、慨然として罪を不良なる家庭と父母の怠慢とに歸して曰く、家庭に於ける不良なる教育の原因は父母にあり、然れども父母は之れを自覺せざるなり、若し兒童をして善良なる教育の效果に浴せしめんと欲せば、先づ父母をして不良なる家庭教育の根源の何れに在るかを知らしめざるべからずと。宜べなり氏の周到なる觀察は、一々兒童に對する教育の弊竇を列擧し、此間秋毫の假借する所なきや。氏惟へらく、惡德惡習を列擧して、

能く之れに觸るゝ事なからしめば、是れ疑もなく美德教育を行はしむる所以なりと。是れ氏が其著書に題して非理の教育法又は惡德の養成法と云ひ、而も微意を其裡面に寓せし所か。氏の著書世に出でしより既に百餘年、此間急激なる時勢の變遷に伴ひ、教育の事又大いに推移せるものあり、隨つて父母の兒童に對するが如きも、多少其面目を新にせるものあるは疑ふべくもあらず。然も今日幾多の家庭を見るに、依然として氏が列擧せし過失を踏襲するなきを保せざると同時に、父母の矛盾せる教育の下に、益其運命を過つの兒童尠少ならず。是れ予が氏の著書に基き、仍ほ彼我の人情風俗に鑑み、本書を編述し、謹んで之を世の父母たる人に獻ぜんとする所以なり。

又父母と相俟つて兒童教養の任に當るものは教師なり。然れども教師にして能く教育の效果を收めんと欲せば、先づ以て兒童の惡德惡習の由つて來る所を看破し、正確に之れが矯正の策を立て、以て兒童に臨まざるべからず。是れ予が世の教師たり、保姆たるものは勿論、苟も兒童の教育に關係あるものは、其直接たると間接たるとを問はず、本書記載の事項に就き、兒童性格の障害に關する智識を蓄へ、之れを學校に應用し、之れを家庭に實驗せん事を希望して止まざる所以なり。

ザルツマン氏の大教育家たること、及び其教育上の功績の如きは、爰に予の紹介を俟たずとも、既に普く人の熟知する所ならん。唯氏の惡德養成法を誦するの人は、如何に氏が大なる工夫を凝らして、世の父母を裨益せんとしたるかを感謝せざるべからず。氏の著書が初めて出版されしは千七百八十年なりしが、幾許ならずして二版三版四版を續行し、而も第四版の如きは、普國の視學官カール・ハーン氏之を增補し、更に又數版を重ぬるに至れり。曩に獨逸國に於て教育叢書の發行せらるゝや、氏の著書亦其隨一として出版せらる、其獨逸國民に愛讀せらるゝや推して知るべきなり。

ザルツマン氏の惡德養成法が一名蟹の横這ひなる奇異の標題を冠せられたるは、一見まことに異樣の感あれども、是れ氏が該書を出版したる當時、其表裝に一疋の親蟹、三疋の子蟹を率ゐて河畔に逍遙するの圖を現はしたるに因る。其寓意は、實に實踐躬行に非ざれば敎育は其效果を擧げ難きを示すにあり。親蟹曾て子蟹に訓誨して謂ひけらく、

汝等決して横行する勿れ、唯正しきに從つて直行すべし。

と、子蟹は親蟹の命を聞きて答ふらく、

父よ、請ふ自ら直行せよ、兒等は悅んで父の爲す所に從はん。

と、然れども親蟹は今日に至りても依然として横行し、子孫連綿百世に至りて直行する能はず。而してザルツマン氏が其の表裝に此圖を擧げたるの意、今日に於ても決して空しからざるを思ふなり。

明治三十七年十月十三日
沙河會戰捷報到著の日に於て

編者識す

第十一版發刊に就て

凡そ國民の消長を司るもの、敎育より先なるはなかるべし。而して其第一義が、兒童の敎育にあるは、識者を俟たずして明かなり。

今や吾が國の文物典章一として備はらざるなく、聖代の英華、優に萬邦の雄たるに足る。然も顧みて國民發展の根本義たる兒童敎育の現狀を窺へば、轉た惆悵の情に堪へざるものあり。是れ蓋し其發展の行程が、歷史的過去に乏しきと同時に、其實行の方法が、極めて困難なるに由らずんばあらず。余は爰に於て微力をも顧みず、自ら此至難の事に當りたるも、前程を望み見れば、獨り日暮れ途遠きの感なき能はず。然れども事や國民の發展に至大の影響を及ぼすもの、乃ち奮つて兒童敎育に關する諸書を公にし、曩にまた本書を編述して之れを世の父母及敎育者諸彥の座右に呈せり。本書は元より不文蕪雜、兒童敎育の眞髓を明かにする

事能はざりしにも拘はらず、發刊以來半歲ならざるに、爰に十有一版を重ぬるに至り、幸にして江湖の一顧を得たるに似たるは、余の大に悅ぶ所なり。

吾が國は世界の强國と戰端を開きしより既に十有六月、社會の耳目は悉く戰局の發展に集注するの觀あるに當り、此乾燥無味なる教育書にして、短時日に斯くも數版を重ぬるに至りしは、吾人をして少しく異樣の思あらしむと雖も、翻つて考ふれば、是れ自ら吾が國民の綽々として餘裕あるを證するものにして、戰時匆忙の際と雖も、外武威を伸張すると同時に、內文事を忽諸に附せざる大雅量の致す所に由らずんばあらず。吾が國の事々物々が、毫も戰爭の影響を蒙らず、極めて健全なる情態にありて、秩序的進步を遂げつゝあるは、吾人の欣喜に堪へざる所。而して本書が幸にも此事實を證明するの一材料たるを得たるは、余の洵に光榮とする所なり。

本書出版以來、讀者諸君より書を寄せらるゝもの頻々、或は讃辭を賜はり、或は高評を辱うす、而して

……此書を讀む世の父母長者たるものは、自己が今日まで子女幼者に對して把持したる誤謬と罪惡とを發見し今更の如く慚愧悔改の情を催ふすと共に、眞の悔悟に伴ふ新たなる光明を發見し、親子自然の情誼を全うすること丶思はれます。

余は此の書を讀んで、訓導裨益せらるゝ所多く、幸にして未だ「我子の惡德」を養成する機會なかりしと雖ども、余の掌中に將來の運命を託されつゝある一人の幼弟に對しては、今後大いに其態度を改むる必要を感じたのであります、本書の如きは唯快樂を以て之を讀むべきものにあらずして、心ずや涙と伴はざれば、眞に讀みしとは言ひ難いと考へます、我國の父母、長上たるものが、之を座右に秘藏して、熟讀玩味、以て子女を敎育し、弱者を訓導するの師範となされなば、我國將來の家庭敎育が、一新紀元を開くは勿論、人道の問題が深く家庭にまで行はれて、親子長幼の間、最も完全なる孝道情誼の成るに至るは疑ふべからざることにして、之がため唯に家庭の幸福を增進するのみならず、國家の慶福之に過るものはないと考へます、(中略)余は感謝と歡喜と希望と責任とを以て、

世の未だ本書を讀まざる父母長者が、必ず一本を座右に備へられん事を望み、爰に本書を紹介致す次第であります。（大日本婦人教育會雜誌第百七十二號）

の如き高評をすら寄せられたるあり。余は元より之れに當らずと雖も、然も本書が兒童教育上、多少裨益する所ありしならんには、余の滿足や實に大なりと云ふべし。今や余は、本書の對偶として、「我子の美德」なる一書を公にせんとす。希くは世の父兄及び教育者諸賢が、彼れと是れとを對照して、以て教育上の參考に供せられん事を。爰に第十一版を發刊するに當り、聊か思ふ所を述ぶ。

明治三十八年五月廿九日
第二太平洋艦隊全滅の
捷報到著の日に於て

大村仁太郎識す

第二十一版序

倫理を說きながら非倫理の行を敢てし、教育を論じながら非教育の家庭を作つて居る人の多い今の世の中、故大村君の如きは眞正の道德實踐家として、教育實際家として、余の最も尊敬した一人であつた。君が素行の立派であつたこと、家庭の美しかつたことは言ふまでもない。深奥な獨逸學の造詣を本として、夙に學校を經營し、又多くの著書を公にして、一面には青年子弟を教養し、一面には家庭の父母を訓戒せられた。君の事業が君の早世とともに頓挫したのは、眞に我が教育界の一大損失であつて、おもへばそれも早や三年の昔となつた。

本書「我子の惡德」は君が晩年の著書の一つで、君がとくに白玉樓中の人となつたのにも拘らず、今尙洛陽の紙價を貴からしめて居るものである。聞けば此度更に第二十一版を出すといふ。一版を一千部とすれば本書は既に二萬の家庭に讀

まれた上、尙其の需要が盛なのである。君の經營した獨逸學協會學校は全國唯一の獨逸語中學校として、年々幾多の俊才を國家に造り出して居る。君の著述は本書をはじめ、すべて幾十版を重ねて、教育界に貢獻して居る。君の死は形骸の死で、君の精神は永久に今の世を指導して居るのである。

余は君の晩年十五年間の友人である。平素君から益を享けたことは擧げるに暇がない。就中君の人格から多大の教訓を受けた。君は何事にも極めて眞摯な熱誠な人であつた。君の書を著すのには有形上無形上自己の利益といふことは毫も眼中に無かつた。世の爲、人の爲といふ眞情から筆を執つたのが、君の著書の大に世に行はれた所以である。頃日君の嗣子謙太郎君來りて、本書の新版に序せよといふ。余は本書の內容に就いて一言しようとは思はぬ、そは全國二萬の家庭の夙に熟知するところである。唯「眞實の心から出たものは眞實の心に入る」といふ獨逸の俚諺を想出して、君を懷ふの情のいよ〳〵切實なことを記すばかりである。

明治四十二年七月

芳賀矢一しるす

袖珍本發刊に際して

この度書肆が本書「我子の惡德」の袖珍本を刊行するといふについて、體裁に少しく變更を加へたところがあります。從前の版には「世の父母に警告す」といふ一章が卷の初めにあつたのを、此の版では卷尾へ廻はしました。これは然し校訂者一個の專斷に出たわけではありません。比較的むづかしい議論の方を卷頭に置いたことは平易を旨とする本書の性質上おもしろくないといふことは、編述者在世のをり既に之を認めて、一再ならず之を口にせられたこともあつたのです。次ぎには本版に於ては舊版より振假名を餘計にしました。これは唯成るべく誰にも讀み易いやうにといふ考に他ならぬのであります。

大正二年五月

校訂者識す

我子の惡德

目次

惡德惡習の養成法……一

第一　讒誣陷擠の惡德を養成する方法……一

秘訣　兒童をして努めて密告を事とせしめよ……一

第二　善事を嫌ふ習慣を養成する方法……六

秘訣　善行を爲さんとする動機を窒塞せしめよ……六

第三　無用の長物を養成する方法……一〇

秘訣　兒童をして其天性と嗜好とに適せざる仕事を强ひて爲さしめよ……一〇

第四　強情なる人物を養成する方法……一六
秘訣　兒童の希望する所を斥けよ、然れども飽くまで希望して止まざれば之を採用せよ……一六
第五　不平家を養成する方法……二
其一
秘訣　兒童をして事物の缺點のみを觀察せしめよ……二
其二
秘訣　兒童をして羨望の念を盛ならしめよ……二五
第六　鄙吝家を養成する方法……二六
秘訣　金錢の效能を過度に信ぜしめよ……二八
第七　懶惰者を養成する方法……二六
秘訣　働くことの苦みと懶ける事の樂みとを知らしめよ……二六

第八　亂雜なる人物を養成する方法……四二
秘訣　秩序の觀念を撲滅せよ……四二
第九　不器用なる人物を養成する方法……四六
秘訣　兒童に過度の保護を與へよ……四六
第十　訓戒を蔑視する惡習を養成する方法……五二
秘訣　絶えず訓戒を與へて兒童の感覺を遲鈍ならしめよ……五二
第十一　虛飾を好む人物を養成する方法……五五
其一
秘訣　早くより虛飾を奬勵せよ……五五
其二
秘訣　盛裝を凝らして兒女を衆人の間に出入せしめよ……五八
第十二　偏狹なる人物を養成する方法……七一

秘訣　兒童に對して偏頗なる待遇を爲せよ……七一
第十三　疑念深き人物を養成する方法……七六
秘訣　兒童に對して虛言を弄ぶべし……七六
第十四　父母を輕んずる惡習を養成する方法……七八
其一　秘訣　父母の不品行なりし事を知らしむべし……七八
其二　秘訣　濫りに命令を下して其實行さるゝや否やを問ふこと勿れ……七九
其三　秘訣　父母を狂犬や人買ひと同視せよ……八三
第十五　仲の惡き兄弟を養成する方法……八四
秘訣　兄弟の一方を偏愛せよ……八四
第十六　無情なる人物を養成する方法……九〇
其一　秘訣　兒童の目前にて他人を惡しざまに批評せよ……九〇
其二　秘訣　同情の發作を窒塞せよ……九二
第十七　我儘なる人物を養成する方法……九六
秘訣　兒童の要求を悉く滿足せしめよ……九六
第十八　虛言者を養成する方法……一〇一
其一　秘訣　早くより虛言を敎へよ……一〇一
其二　秘訣　虛言を稱揚せよ……一〇五

其三　秘訣　兒童の告ぐる所を悉く信用せよ……一〇六
其四　秘訣　兒童が事實を告白する時之れを處罰せよ……一〇九
其五　秘訣　兒童に虚言を弄する機會を與へよ……一一三
其六……一一五
第十九　痴愚者を養成する方法……一一八
其一　秘訣　兒童に過ちある時は痛く之れを打擲せよ……一一八
其二　秘訣　思ふ儘に暴飲せよ……一二〇
其三　秘訣　老成早熟の方法を講ずべし……一二一
第二十　盗食の惡習を養成する方法……一二五
其一　秘訣　飽くまでも日腹の慾を充さしめよ……一二五
其二　秘訣　兒童が求むる儘に小遣錢を與へよ、而して其用途を問ふ事勿れ……一二九
第二十一　大食家を養成する方法……一三一
秘訣　胃袋の張裂くる程飽食せしめよ……一三一
第二十二　残酷なる人物を養成する方法……一三三
秘訣　動物を虐待して其苦痛の狀態を目擊せしめよ……一三三
第二十三　復讐心を養成する方法……一三六

其一
秘訣　兒童の不平を破裂せしむる樣努むべし……一三六
其二
秘訣　怨恨を深く兒童の腦裡に印象せしめよ……一三八
第二十四　嫉妬深き人物を養成する方法……一四二
秘訣　他人の幸福を見る時は之を自己の不幸なりと思惟せしめよ……一四二
第二十五　他人の損害を喜ぶ惡質を養成する方法……一四六
秘訣　他人の幸福を見る毎に不愉快を感ぜしめよ……一四六
第二十六　無害の動物を嫌惡する習慣を養成する方法……一五二
秘訣　無害の動物を強ひて有害なりと思惟せしめよ……一五二
第二十七　無趣味なる人物を養成する方法……一五四

秘訣　兒童が天然の美を樂まんとする時之れを制止せよ……一五四
第二十八　臆病者を養成する方法……一五八
其一
秘訣　兒童に怪談を聞かしめ怪力亂神を信ぜしめよ……一五八
其二
秘訣　雷電の恐るべきを知らしめよ……一六〇
其三
秘訣　兒童に死の最も恐るべき事を知らしめよ……一六一
第二十九　累弱なる身體を作る方法……一六三
秘訣　兒童の健康を害し生命を危うする手段を講ぜよ……一六三
第三十　種々の惡德を養成するに特效ある方法六種……一七六
世の父母に警告す……一九四

目次

人類の道德的弱點＝父母の妄想臆斷の爲め兒童の受くる損害＝兒童の累弱なる體質は之を父母に承く＝兒童は不當なる責罰を受くること多し＝體質性質共に遺傳す＝兒童を危險に陷らしむるものは父母なり＝父母は往々教育の意義を誤解す＝父母の過失＝父母の放漫なる教育の結果は父母自身の快樂を奪却す＝所謂子寶の意味＝兒童の價値＝兒童の不幸に陷る原因は其責父母にあり

我子の惡德

大村仁太郎編述

惡德惡習の養成法

第一　讒誣陷擠の惡德を養成する方法

秘訣　兒童をして努めて密告を事とせしめよ

他人の秘事缺點を探ろ惡癖

去る會社の役員で、敏腕家とか才子とかの評判ある某は、頗る他人の秘事缺點を探るのが好きで、皿の樣な目玉と、法螺貝の樣な耳で、世間のあらや內證事を探し出して得意として居た。此惡癖は段々と增長して、遂に一通りの事では滿足が出來ず、時には一子の太郎にまで探偵の役目を仰付ける事がある。

おい、隣りの家では、今日主人が旅行に出たから、留守宅へどんな人が出入るか一寸見てこいとか、又何處そこでは召使の者が忙しそうに働いて居るから、今日は何事か出來したのだらう、そつと覗いてこいとか、太郎は日々斯かる使命を受けて東奔西走して居た。時によると、日中樣子を探る事が出來ないから、闇夜に其家の窓下に佇立み、一部始終を探つて來る事もある。而して其報告が詳細で、殊に他人の秘密に關する事であると、父は喜色滿面に溢れて太郎を稱讃した。

元來太郎は怜悧な性質であるから、父の樣子を見て思ふ樣、父の歡心を買へば己れも讃められる、己れが讃められるゝには他人の事を惡し樣に報告するに限ると。此に於て太郎は其見聞した事柄を誇大にし、時には全く存在しない事をも構造して、及ぶだけ他の惡しからん樣に父に物語つた。父は之れを聞いて頗る快心し、太郎の觀察力の緻密なるを喜び、後來は天晴なる人物になるであらうと母親に語つた。こゝに於て太郎は益々得意になり、頻りに父の喜ぶ樣な事件を探索して密告する。例へば、隣家の主人が旅行の留守中に女の來客があつたといへば、父は冷淡に「さうか」と答へるのみであるから、太郎は工夫を凝らして、若い男の來客があつて、深夜まで笑ひ戯れて居たと告ぐるのである。そうすると父は目を瞠き耳を欹て、一生懸命に太郎の報告を聞く。太郎たるもの、何ぞ此方面に於て長足の進歩をなさどらんやである。殊に何處の家で夫婦喧嘩があつて、家内は離緣になつたとか、何處では擲り合ひがあつて、怪我人も出來たとかいふ樣な事は、父の最も好める話であるから、太郎の發達は、唯社會暗黑の半面を追うて日に益々進み行くのである。

元來兒童と云ふものには、兎角人に氣に入られたいといふ心がある。太郎が父に氣に入られたい一心より益々斯かる術に長ずるのは、無理もない次第といはな

ければならぬ。故に太郎の悪習は日一日と嵩じ來たつて、遂には如何なる人の前でも、讒誣陷擠を事とし、隣近所では、太郎を忌み嫌ふ事毛虫の如くになつた。若し太郎が人の悪事を物語る時には、辯舌爽かに、些の淀もなく、大人と雖も到底之れには及ばない程である。兒童の眼には、總べての事物の悪しき方面が兎角映じ易いのであるが、殊に斯く敎育された太郎の觀察眼には、善い方面の事は少しも映じない。

斯くして太郎の親の友人や、近隣の人々の間には、太郎の宜い加減の仲口の爲めに、圓滑を缺く事が度々起るのである。時には彼の悪戯が發見されて、酷く打擲される事もあり、又友達などから痛く詰責される事などもあるが、太郎の悪癖は少しも直らない。彼は年を重ねて一人前の男になつた後も、絶えず讒誣中傷を事とする。そうして彼が最も悪し樣に罵るものは誰であらうか。其は實に、實に、外ならぬ彼の父親であつた　是れ彼の悪口は決して親兄弟と雖も容赦しないからである。太郎は口癖の樣に云うて居た。「俺の親爺ほど因業な奴はない、一年中人の悪口を聞いて喜んで居る、餘程旋毛の曲つて居る奴だ」と。親爺も是れを聞いて默つては居ない。之れが爲め家庭の風波は常に絶えた事がない。親爺は嘆息して云ふ樣、「長い間丹青して養育てた子供が、俺の事を悪口するとは何事だ。斯んな奴は到底家の爲めにならないから、今の中に勘當した方が宜い」と。曾ては將來有爲の人物になるであらうと思つた子が、今斯かるものとなつたのを見ては、父親も定めし氣持ちが悪からう。然し罪は己れにあると思うて、諦めなければなるまい。

第二　善事を嫌ふ習慣を養成する方法

秘訣　善行を爲さんとする動機を窒塞せしめよ

春子は、無邪氣な可愛らしい誠に優しい心掛けの子である。或日春子は「下顎を襟に埋めて熟々と考へる樣、阿父さんは日頃自分を世話して下さるから、自分も之れから一生懸命阿父さんの御悅びになる樣な事を致しませうと。斯くて春子は、朝起きるや否や甲斐々々しく働き、學校から歸ると、直ぐに机の前に座り込み、今日の日課の復習やら、明日の下讀みなどをして、さて自ら思ふ樣、早く阿父さんが御歸りになればいゝ、自分が此樣に勉强して居るのを御覽になれば、どんなに御悅びになるであらうと。春子は、唯々父の歸り來るのを待つて居た。

夕映が美しい色を庭の築山のあたりに照らし込んで來た時、今か今かと待つて居た、車の響が門のあたりにした。それと同時に、車夫の御歸りと叫ぶ聲が聞えた。やがて阿父さんは家へ這入つて、春子の部屋へ廻つて來た。春子は今お褒めに預るかと思つて、じいつと、本を讀みながら心に待ち構へて居た。すると父親は、猫の「玉」を撫でながら、春子には一言もなく出て行つて仕舞ひ、之れから直ぐ某所の集會へ行くのだとて車夫を呼んだ。春子の失望は思ふべしである。

然し春子は再び起ち上つて、今度は、阿父さんの部屋の掃除にかゝつた。先づ机の上の塵をすつかり取り拂ひ、書物などを奇麗に並べたて、おまけに、心盡しの山茶花を一輪挿に活けて其處に飾つた。それから阿父さんを喜ばさうとて一封の手紙を書いた。

父上さま、わたくしは今日から心を入れ替へて、出來るだけ働いて、父上さまに孝行を盡すつもりです。

と。嬰て夜の九時頃、父は集會より歸り來たつて其部屋へ這入つた。無邪氣な春

子は、後から隨いて行つて、今か今かと思つて父の顏を覗いて居た。然し父は沈默つて居る。春子の働いた跡は其眼に映じないのであらうか。殊に一輪の山茶花、其れ位は眼に映じさうなものである。然し父は依然沈默を破らない。見よ、春子の小さい富士額には、心配の色が現はれて來た。

閃々と輝く美しい洋燈の光に、宛も寂寥の氣が迫つて來る樣な心地がする時、父は突然口を開いた。

父　春子、硯箱はどうした。

豈圖らんや、之れが春子の得たる報酬であつた。然し其硯箱は春子が先刻手紙を書く時、つい置き忘れをしたのであるから、春子は容易に口を開き得ない。

春　えゝ……

父　お前が何處へか持つて行つたのだらう。

ヘルバルト曰く、教育者たるものは兒童をして善惡を選遠みざけて自己を知らしむべし、是れ兒童心を陶成する唯一の方法なり

春　えゝ私……私が……

父　馬鹿奴、なぜ阿父さんの机のものに手を付けたのだ。

然し春子は未だ全くは失望しない。いくらかう叱られても、阿父さんが手紙を見て下さつたら、自分の心が判つて、屹度褒めて下さるだらうと、思ひ切つて手紙を父に渡した。然し苦り切つた父は、此優しい春子を見向きもしないで、邪慳にも、

父　そんなものを見て居る暇はない。

嗚呼、賴みの綱は全く切れた。無邪氣なる優しい春子、彼の眞心から出た溫かい情は、最早父に向つて注ぐ事が出來なくなつた。爾來彼の女は全く其心理作用を一轉して、冷かなる人生の半面にのみ走つた。

憫むべきは春子である。而して自らの幸福と其子の幸福とを犧牲にする痴呆

は、實に實に、春子の父其人ではあるまいか。

第三　無用の長物を養成する方法

秘訣　兒童をして其天性と嗜好とに適せざる仕事を強ひて爲さしめよ

都より程遠からぬ或る田舍に、鶴作といふ相應に大きな百姓があつた。彼は別に學問をした譯でもないが、此近邊には珍らしい道理のよく分つて居る男で、子供の教育等も百姓には不似合に行き屆いて居た。彼の考は、兒童は其天性に應じて教育しなければならぬ、兒童の厭がる事を無理にやらせるのは宜しくない、と云ふにあつて、至極穩健なる見解といふべきである。

鶴作に二人の男の子がある、兄を豐作、弟を萬作と呼ぶ。或時鶴作は二人を呼んで、

父　お前方も、漸次大きくなつて來たが、一體お前達は何になる積りか、云つて見なさい。

兄　私は矢張り阿父さんの樣に、百姓になりたうございます。

弟　私は學校の先生になりたうございます。

父　宜しい、それではお前達の望み通りにしてやるが、百姓は中々骨の折れる仕事だから、油斷がない樣に稼いで私の後を繼ぐ樣にしなさい。又先生になるのも隨分六ケ敷い。第一本が讀めなければいけない。それから近頃では、英吉利や、獨逸などゝいふ國々の言語も出來なければならない。中々百姓の子供には骨の折れる事だが、お前は其邊の事を承知かな。

弟　えゝ承知です、どんなに苦しくとも屹度やり遂げます。

翌日父は萬作を連れて出京し、幸ひ懇意の同村の某が學校の教師をして居る故、其處へ萬作を托して己れは歸村した。さて某はつく〴〵萬作を見るに、百姓の子

には似合はず、才智もあり、且つは學問が好きなので、將來多望の少年だと思ひ頗る懇切に之れを指導した。萬作も勉強甲斐があつて、遂には師範學校を優等で卒業し、直ちに某地に招聘され、其學校の首席教員となつた。又兄の豐作も、親の家業を引受けて日夜怠らず、之れもめつきり身代を肥やし、田畑を殖やして、可なりの分限者となり、父なる鶴作は安心して大往生を遂げたと云ふ事である。

偖て豐作と萬作の兩人は、父の御蔭で、極めて幸福な生活を營む事が出來、各其家業を樂んで暮して居たが、やがて一人宛の子供も出來、早くも十歳の春を迎へる事となつた。そこで兩人の父は我子の將來の方向を定めてやらうと考へたが、心窃に思ふ樣、自分等の生活は如何にも幸福である、且つ自分等は別段に苦みもせずに目的を達する事が出來たのである。して見ると自分等の子供にも矢張り親の職業を繼續させるのが、最も適當ではあるまいかと。玆に豐作は其子豐藏に農業を仕込み、やれ麥蒔だの、やれ稻刈だのといふ仕事をさせ、萬作は其子萬吉に、やれ漢學だの、やれ英語だのと、種々の學問を敎へ始めた。

然し子供等は、少しも親の敎へを守らない。豐藏は暇さへあれば、蹴を棄てゝ懷中から書物を取出して讀み始める。百姓等が節面白げに謠ふ田植歌には、彼は少しも耳を假さないのである。彼はどう見ても百姓の子とは思へない。豐藏は農業を以て己れの幸福を得る途でないとして、無論之に從事することを悅ばないのである。又萬吉の方はといふと、之れは又學問が大嫌ひで、親が一生懸命に勉強させ樣とすると、彼は何とか口實を作つて之れを逃れ樣とし、どうしても父の命を用ひない。兩方の親達はぶつぶと怒つて居る。

然し斯くて已むべきではないから、否應なしに己れ達の家業を承け繼がせ樣と、豐藏が本を讀み始めると、豐作は之れを打擲し、萬吉が復習を怠ると、萬作は之

れを苛責し、大に骨を折つた結果、豐藏は漸く一人前の百姓となり、萬吉も尻から何番といふ成績で、兎も角も師範學校を卒業し、さる小學校の教員さんと成つた。親達の喜びは大したものであつた。

だが此喜びも何時までか續かう、豐作と萬作の隱居した後はどうであつたか、彼等は老後實に悲しい境遇に陷つたのである。秋が來て收穫の忙しい時ですらも、五月雨が降り出す田植の時ですらも、豐藏は一向に外へ出て働かない、終日机に向つて讀書三昧に耽つて居る。かゝる始末で、家業の方は一切人任せであるから、下男や小作人は勝手な眞似をして、出來得る限りは横着を極め込み、時には米の一俵や二俵は瞞着す事が出來する。だが豐藏は之れにも一向に氣か付かない。で五六年の後には、立派な屋敷も人手に渡り、借金取りが門前に群をなす樣になつたといふ事である。

又萬吉の方はどうかと云ふに、之れも餘り香ばしい事がない。學問も出來ないし、授業も下手だし、時には知らない字に出會はして、生徒のもの笑ひとなる事もある。又兎角缺席勝ちで、校長さんの御眼玉を頂戴する事もある。從つて學校の勤務も、如何にも不愉快でたまらない。或日從兄弟同志寄り合つて、互に其境遇を嘆息して云ふ樣、

實に世渡りは苦しいもんだ、斯んなに心配や苦勞をする位なら、寧そ死んだ方が宜い樣だ。生きて居ても役には立たないし、人には迷惑を懸けるし、實に此世がいやになつて來た。

と。嗚呼不幸なる人よ、御身等は父なる人の誤解の犧牲となつたのである。罪は御身等に在るのではない、世の中も左程苦しいものではない。唯御身等の父は、御身等の生涯を過つたのである。

第四　強情なる人物を養成する方法

秘訣　兒童の希望する所を斥けよ、然れども飽くまで希望して止まざれば之を採用せよ

某省に出勤して居る小官吏某の細君は、却々の勉強家で、朝早くから夜遅くまで齷齪と働いて居るが、子供は大勢で中々世話が届き兼ねるのである。末子の七郎は、當年僅に二歳、母親の側に遊んで居て、阿母さん阿母さんと云つて乳を求める。然し阿母さんは針仕事をして居て取り合はない。野に餌を拾つて居る鶏でも、雛鶏が呼ぶ時は、今迄食べて居た餌を捨てゝも飛んで行くが、此阿母さんは鶏でないせいか、いくら七郎が呼んでも返事をしない。三遍呼ぶ。然し返事がない。五遍呼ぶ、未だ返事がない。憐れなる七郎は、泣聲を出して母の膝にすり寄つて來る。然も阿母さんは返事をしないのである。頑是ない七郎、最早我慢が出來ないで、仕事をして居る阿母さんの耳下で、大聲を揚げて喚き出す。此に至つては、いかに鶏でない阿母さんでも默つて居る譯には行かず、仕事を放抛つて胸を開け、乳を七郎に當てがひながら、

さあ乳を御呑み、お前が居ると仕事も何も出來やしない。

斯の如き育兒法は、何を意味して居るであらうか。一言にして盡せば、柔和しく賴んでは願意が聞き屆けられない、飽迄も強情に主張して先方を脅せば、終に思ふ事が成就するといふ事を兒童に會得せしむるのではあるまいか。

七郎は成長するに從ひ、度々の經驗によつて、此手段の最も有効なる事を覺つたのである。故に母に向つて希望があるときは、穩當に之れを願ふ事をせず、初めより大聲に喚き立てゝ母を脅し、而して其希望を果たす樣になつた。然し之れでも其意志が貫徹しないと、座敷中を狂ひ回つて手當り次第に器物を抛げ散し、

兒童の啼泣は起因する所の欲望を滿足せしめんとするに過ぎざるのみ、其意志を強情に主張するは可なれども、然れども之れを許すべからざるは知る所にあらず

恰も狂人の樣な眞似をする。斯くて何時でも思ふ事が成就する。母親は周章しく、

そんなに泣くと癇が起るよ、さあ、お前の好きな御菓子をあげやう……いやなの、それぢや此林檎を上げやう……

如何に前後矛盾の處置ではあるまいか。然しかゝる母親は、豈に啻に七郎の母のみならんやである。

七郎が長じて十四五歳になつてからは、此流儀が益々增長して來た。彼は兩親に向つて何か希望があれば、最初より此脅迫的手段を慣用し、其希望が滿されるまでは止めない。彼は時として殊更に部屋にたて籠り、或は食事を廢し、或は狂人の樣に亂暴を始める。而して兩親は如何ともすることが出來ないのであつた。

父親は殆んど我子の不行跡に閉口して、一日近處に居る同僚に相談した。

家の悴にも殆んど閉口です、あんな强情な奴は見た事がない、踏まうが蹴らうが、どうする事も出來ませんよ。一遍云ひ出したら、どうあつても我意を押し通すのです。實に手の付け樣がない奴です。君、何か名案がありませんかね。

すると同僚が云ふには、

君、そんな事があるもんですかね。子供の言ふ事を一々押し通させた日には際限がありません。ようございます、今度そういふ場合があつたら、僕を呼びに來て呉れ給へ、屹度旨くやつて見せますから。

其後間もなく、七郎は父に向つて當時流行の赤皮の靴を請求した。父親は無論承知しない。七郎は例によつて呶鳴り出した。そこで使は直ちに同僚の處へ遣はされ、茲に二人で七郎を腕力づくで折檻した。

七郎は非常に憤慨し、血のにじんだ眦を釣り上げ、肩で息をしながら家を駈け出した。

もう親の世話なんかになるものか、見ろ、今に思ひ知らせてやるから。

是が亂暴息子の捨臺詞であつたのだ。

親爺は七郎を追ひかけて、宥め賺さうとしたが、同僚は其不可を說いて、それだから駄目なのです。七郎さんだつて、腹が減りや屹度家へ歸つて來るに違ひない、外で飯を喰べる所もないのだから。

待てども、待てども、七郎の消息は杳として聞えない。數年の後或る新聞は、壯士七郎の脅喝取財によつて檢事局へ廻された事を報じた。

父親は同僚に不平を云うた。

君の御蔭で大切な子供を一人なくして仕舞つた。靴一足位は借金しても買つてやる事が出來るのであつたに。

嗚呼、是れ果して同僚の罪であらうか。憐むべきは七郎である。

第五　不平家を養成する方法

其一

秘訣　兒童たして事物の缺點のみを觀察せしめよ

私の處の奥樣程、奇妙なお方はありませんよ、恐らく「夫れで宜い」と仰つた事は生れてからないのでせうよ。と、井戸端會議で、或る下女殿が喋舌りだした。滿場唯寂として、彼の演說のみ獨り聲高々と響き渡つた。其要領を摘めば次の通りである。

御覽なさい、どんな旨いものを喰べる時だつて、おいしいと仰つた事はない。藥でも上がる樣に額に八の字を寄せて、苦いとか、辛いとか、何か難癖を付けるんですよ。やれ此肉は硬い、やれ此魚は腐敗つて居ろ、こんな不味い漬物は食べ

た事がない、此御飯は焦臭い、こんな硬いのを喰べると胃が惡くなると、始終御小言ばかりで、時には御飯の半ばで、御部屋へお引つ込みになることもあるんですよ。いくら大家から御出なすつたつて、あんなに我儘で、おまけに惡い所ばかりに氣を付けて見て居る方は餘りありませんよ。それもまだ宜いとしてね、先達慈善何とか會とかへお出でになつた時は、それこそ大變でした。和服にしやうか、洋服にしやうか、洋服ではハイカラ過ぎる、和服では流行遲れだからつて、やがて一時間も小言を並べ、揚句のはてに御召をあらひざらひ出して、やれ此縞柄は田舍臭い、此色合は流行らない、此洋服は身體に合はない、それもいけない、これもいけないつて怒り散し、やつと三時間もたつて御出かけになつてから、こんどはお歸りになつて、又大變な御小言なんですよ、誰さんは厭な人だ、誰さんの奥樣は氣障だ、もうあんな人と交際するのは懲り〳〵だつて、一人でも御氣に召す人がないのですつて。

それもまだ宜いとして、天氣が惡いつて小言を云つたり、寒いとか暑いとかいつて怒つたり、それこそ奉公人が見じめですよ。此間なんかも、暑い〳〵つて御怒りなすつて、奉公人に一日團扇で煽がしたんだつて。其も團扇の持ち方が惡いとか、ちつとも風がこないとかいつて、揚句の果てが奉公人を追ひ出すといふ騒ぎなんで……

下女の演說は斯くして終つたが、然らば其家の子供達はどうであらう。吾々は其が聞きたいのである。

聞く所によれば、此奥樣は以上の如き事を子供等の前でも平氣でやるそうである。母の眞似をするのは子供の常で、毎朝起きる時などは、實に中々の騒ぎであるそうだ。

一人の子供は何か氣に入らないとて天地も裂けんばかりに泣き出せば、一人は足袋が見えないとて怒りだす。一人が帶を締めて呉れとて喚けば、他の一人はもつと寢て居るのだと駄々を捏ね廻す。此騒ぎは起きる時ばかりでない、朝飯、晝飯、夕飯の時なども同樣である。

甲　おい、お鍋！　なぜ早く食事の支度をしないのだ。

乙　あゝ熱い、こんな熱い茶をなぜ飲ませるんだ、舌が燒けるぢやないか。

丙　おや〳〵、此お魚は骨ばつかりだよ、食べられやしない。

丁　おい、早く給仕をしないか、早く〳〵。

その騒々しい事一通りでない。彼等が喚き草臥れて寢ない間は、丸で家中が轉倒へりそうな有樣であるといふ。

流石の奥樣もホト〳〵いやになつて、或時子供等を呼んで云ふには、

なぜ御前達はそんなに我儘なのです、貧乏人の子供を御覽なさい、毎日御香の物ばかりで御飯を喰べても小言は云ひません、若し之れから行儀を直さないと酷い目に遭はせますよ。

と。然し子供等は依然として我儘で、依然として不平不滿、常に膨れ上がつて騒いで居るそうである。

思ふに子供等よりも、先づ第一に謹まなければならぬ人が、外にある樣である。

其二

秘訣　兒童をして羨望の念を盛ならしめよ

三河屋の主人は至つて職業に勉強で、店も繁昌し、暮し向きも不如意ではない。寧ろ世間よりは羨まれる地位に居るのである。細君も亦働き者で、家内中健康で、至つて無事平安の樣子である。

羨望心は昂じて不平となり、不滿となり、自らせんとして他人を損傷せんとするものなり

が、此主人に一つの癖がある、卽ち何に付けても不滿足で、兎角不平勝ちで、妻子に對しても、自分ほど不仕合なものはない、世間の人は羨ましいものだと、常に他人の境遇を褒めちぎり、從つて子供等の注意を其方にのみ向けさして居る。食事の際などには、家ではこんな不味いものを食べて居るが、誰某の處では、鯛の吸物だの、鰻の蒲燒などを毎日食べて居るんだ、どうだい羨ましい事ぢやないかと、折角の食事もこんな風にして不味くして了ふ。子供等も幼な心に自然と不滿の念を生じる。又美しい衣服を着飾つて居る女子などが、店前を通れば、直ちに子供等を呼んで、次の樣な事を云ひ聞かせる。

どうだい、あの子は奇麗な着物を着て居るぢやないか。あれはお前、大變高價いものなんだ。あの帶だつて十圓や十五圓は出て居るんだよ。其處へいくと家の子供は可哀相だ、情けないことだ。お前達にも宜いものを着せたいと思つては居るが、着せる譯にいかないんだ。あゝ羨ましい譯ぢやないか。

向ふから馬車に乘つて來る人を見ると、

金持ちにはなりたいもんだね、本統に金持ち程結構なものはない。御前達は不仕合だから、自分の足で歩行かなけりやならない、殘念ぢやないか。

又割烹屋抔で他の客が何か旨さうなものを食べて居るのを見ると、

御覽、あの料理は大層旨さうだ、だが阿父さんはお金がないから、御前達にあんな御馳走をする事は出來ないんだよ。

斯くして兒童等が不平不滿の精神は日に皷吹された。父親が望む如く、大不平家、殊に下劣なる不平家となり終つた。彼等は如何なる事に出遇つても、更に愉快といふ事を感じない。日々怏々たる不平の雲に蔽はれて、遂に憂愁なる世界より、更に暗黑なる死の國へ移されたといふ事である。

第六　鄙吝家を養成する方法

秘訣　金錢の效能を過度に信ぜしめよ

當時實業界で某君といへば、誰も知らぬものはない。銀行でも會社でも、重役の中に某君の名を列して居ないのは、恐らくはない位である。だが某君の斯界に名勢あると同時に、又大鄙吝家であるといふ評判も、斯界の隅から隅まで響き渡つて居る。記者も某君とは豫てよりの知合であるが、別段噂ほどの大した鄙吝家とは思はない。唯某君の性質として、甚しく金錢を大切にし、同時に又多大の尊敬を之れに拂つて居ると云ふだけは、事實に相違ないと信じて居るのである。

某君は獨力で其身代を作り上げた程の人物であるから、實に自信が強い。而して自ら信じた事は之れを口にするを躊躇しないのみならず、直に之れを實行して憚らない。記者が某君より聞く所によれば、一生の中最も愉快なる時は、金を算へる時で、一生の中最も歡喜すべき日は、金錢の收入が最も多き日であると。某君の此議論を言ひ換へれば、人間の幸福は卽ち富である、富は卽ち人生の幸福であるといふに歸着するのである。而して某君は此主義を以て、其子金藏を養成したのであつた。

丁度土曜日の晩である、記者が某君の許を訪問した時、某君は愛子金藏を前にして、切りに金錢の有難味や、效能の偉大なる事を敎訓しつゝあつたが、記者の訪問を機に、滿面に笑を湛へつゝ物語る樣、「自分は日淸戰爭の際に御用商人として陸軍に鑵詰を賣込んだが、恐らく生涯に此位愉快な時はなかつたらう、實に八割以上の利得は、此時に占められたのである」と。某君の得意然たる面影はランプの光を帶びて鮮かに、熱心に父の談話を聞いて居る一子金藏の眼には隨喜の涙さへも滴りさうであつた。但し記者の耳朶には、某君の嬉々の聲は地獄に於ける惡

魔の嘲笑の樣に響いたのである。

金藏が、學校から歸り來つて聞く處のものは、常に利益とか損失とか云ふ金錢上の話のみである。何某は持參金幾萬圓附きの嫁御を貰ひ、何某は遺產相續によつて幾萬圓の財產家になつた、人は常に拔け目なく此樣に立廻らなければならぬとは、金藏が父より聞く所の常套の敎訓である。金藏たるもの如何ぞ父の主義に感化されずして已むべき。彼れ常に說をなして曰く、人生の幸福は金錢の多少と比例すべきものである。世人の所謂正義とか博愛とか人道とか云ふものは、畢竟するに己れを知らざる滑稽の極みである。浮世に於ては金の音より外に何の愉快かある。人間生涯の大目的は倉庫に滿つる黃金以外にあるべきものでないと。斯くして金藏は父に劣らぬ拜金宗の代表者となり終つたのである。

某君は金を儲けると同時に、一方には又金錢の支出を非常に制限した。蓋し宴會、饗應、物見遊山等、總べて娛樂の類は、彼の眼には一種の罪惡として映じるのである。大吝嗇家の評判も、恐らくは此邊より出たのであらう。某君は又慈善とか施與とかに付いては一種の見解を有し、敢て非難もしないが、之れを稱揚する事などは決してない。彼謂へらく、自分は餘裕がない、其故に慈善や施與をする必要を認めない。否必要を認めないばかりでなく、施與をする義務も、力もないと。實に黃金を山の如く積んでも、某君自身には餘裕があると認められないのである。されば某君は、結局死に至る迄、一文半錢の施與をする機會を持たないのである。某君又謂へらく、他人の恩惠に浴し、他人の施與を受くるは、畢竟自家の不注意より生ずる過ちで、金錢を大切にせぬ罰に外ならない、斯かる人間を救助するは、寧ろ神の意に反くものであると。

他を慮すること唯己れの所有せるものを固執することに過ぐるものの、之を吝嗇と云ふ

金藏が八歲の時より、父は貯蓄の實習の爲めとて、日に二十錢宛の小遣錢を與へ

た。而して毎週の終りになると、金藏に一々其用途を問ひ糺して、之を教導する方法を講ずるのである。若し金藏が一週間一回も小遣錢を消費しなければ、父は非常の喜悅を以て金藏の貯蓄心の大なる事を賞讃し、褒美として別に十錢づゝを與へる事にした。故に金藏の貯蓄心は益々其度を高めて、金錢を崇拜する事神の如く、之を所有するの如何に愉快なるかを感ずるに至つた。今日は日曜日だから上野の動物園に行かう、明日は天長節だから團子坂の菊見に行かないか等の誘引は、金藏の全く拒絕する所で、流石の父も其貯蓄心の盛なるには殆んど感服するに至つたのである。

若しお前が昨日友達と一緒に散歩に出掛けたら、幾らゝの金が減つて、お前は今日金を勘定する時に大に不愉快を感じたのであらう。お前は御父さんの命令を用ひて、散歩に行かなかつた爲め、今日は愉快に金の顏を見る事が出來るのだ。よく此道理を辨へ、油斷なく勉強して貯蓄しなさい。

之れは父が金藏に與へた教訓の一つである。金藏は悅んで之れを服膺し、日に貯金匣の重くなるのを無二の樂みとして居た。そうして金が纏つて一圓となれば、父は之れを一圓紙幣に引き替へ、以て金藏が端錢と思うて之れを使用するのを防ぐ手段とした。

若し、お前の金が五十圓になつたら、如何に樂しい事であらう。其を貸し出せば、毎年少くも六分や八分の利子は取る事が出來る。利子に利子が積れば、五十圓が六十圓となる、百圓となるのも瞬く間だ。

かうなれば、金藏の頭に段々堅まつて、人間の幸福は金で、金は卽ち幸福であるといふ信念愈〻確乎として來る。彼は出來得る限り金を殖やす方法を講じ、年も行かぬに、或は不用の品物を賣り飛ばし、或は書物や道具類を學校の朋輩に賣り付け、

一向貯金の多くならん事を努めて居た。金藏十歳の時には、斯かる方法で少年に不似合ひの貯金が出來、十二歳の時には、はや二三百圓となり、高利を貪つて之れを貸出すといふ事になつた。父なる某君の悅は譬ふるに物がない。彼は自己の教育の效果が斯くも偉大なるを嘆美して、金藏こそ後來最も幸福なる生活を營み得る人間であると、心窃に安堵の思ひをして居た。

金藏が廿四歳になつた時、圖らずも彼は一少女を見て憎からず思うた。彼とて亦一個青春の血溢るゝ人間であるから、此感情が嵩じて、遂に其少女と結婚したいと考へるまでに進んだ。が、彼の幼少より受けたる拜金主義の教育は、此場合に臨んでも猶其本心を失はしめない。此少女は家が貧しくて、元より持參金もなく、衣裳寶玉なども勿論ないといふ事を聞いた彼は、慾と金には換へられないとて、憐れ此緣談は成立しなかつた。而して金藏は其後金滿家の後家さんと緣組をする事になつた。彼は其時血氣盛りの二十五歳で、其妻になつた後家さんは、實に實に、五十有四歳であるとの噂である。

金藏の行動は萬事斯くの如く、居ても起つても、其念頭に浮ぶものは金で、彼の一擧手一投足は金を措いて他に標準がない。彼には生活の快樂も、理想の快樂もない。唯黃金は彼の生命で、黃金は彼の理想である。消費と損耗は惡で、收入と利得は善であるとは、彼の腦髓を支配する一切の道德である。彼の居常の有樣も之れによつて略ぼ察する事が出來る。彼は喰ふに鮮肉なく、僅に膳に上ぼるものは、腐れた一片の肉か、古びた野菜である。蓋し衞生と健康は彼の意に介する處でない。彼は散步した事がない、又物見遊山に行つた事もない、而して彼の机上を飾る數卷の書物は、大家の名著作でなく、實に實に、金錢出納や、貨借の帳簿である。若し世に砂を嚙むが如き無味乾燥の人格の代表者を求めたならば、恐

らくは金藏其人より外に適當なる人物はあるまい。

彼が死んだ時、其遺産は幾十萬かあつたが、彼の葬式に會したものは、僅に近親のもの十數人といふ誠に情ない事であつた。然し其よりも猶ほ悲慘なるは、彼が病床にあつて呻吟して居た時である。彼は病篤くして命旦夕に迫るれにも拘はらず、猶ほ醫藥や滋養物を求めなかつた爲め、實に見るも無殘なる最後を遂げたといふ事である。而も「生命は惜しいが金には換へられない」とは、彼が臨終の遺言であつたそうだ。

第七　懶惰者を養成する方法

秘訣　働くことの苦みと懶ける事の樂みとを知らしめよ

能く考へて見ると、毎日何も働かずに懶けて居る程六か敷い事はない。何故なれば、何か仕事をしやう、何か働いて見やうといふのは、人間の天性で、人間の生活といふのは、生きて働いて居るといふ意味に外ならない。卽ち死は靜止の狀態を示し、生は活動の狀態を表はして居るのである。人間の身體を見ても直ぐ判る事である、血液は常に五體を循環して少しも休まない、之れが休む時は卽ち死ぬ時だ。神經の作用も其通りで、始終鋭敏に働いて居て、吾々の身體に對し恰も警察官の如き役目を勤めて居る。肺臟も其通り、胃の腑も其通り、呼吸器や消化器は、人間が眠つて居ても覺めて居ても少しも休まないのである。それであるから兒童は生れると直ぐ手足を動して自由自在に之れを働かせやうとする。之れも亦人間が寸時も働かないでは居られない證據である。又一例を擧げれば、人間が毎日食べる澤山の食物も、唯胃の腑に入れた儘では、消化が不十分で、直ぐに胃病とか腸加答留とかいふ疾病に罹る。卽ち是非とも運動して消化を助けなければならぬ必要が生ずるのである。斯の如き次第であるから、毎日安閑と手を束ねて

勞力を厭うて之に近づかざるものは、當に緩慢なる事なるものなり、難きを避けて易きに就くとは、一も努めずして傍らに觀るのみなる手柚の如く、眼力も氣力も發くなき心の些なき

の、是れ皆懶惰に外ならず

家に寢轉んで居るのは、甚しく人間の天性に反し、人間の身心を害する事は疑のない事である。故に懶惰と云ふ事は、始めにも云うた通り、中々六か敷い藝であると云はなければならぬ。

或處に物臭先生と綽名された學者が居た。此先生働く事が何よりの嫌ひで、何か少し骨の折れる仕事があると、一週間も二週間も前から、虹の樣な溜息を吐いて、

到頭來週は之れ〳〵の仕事をしなければならない樣になつた。困つたものだ。

人間に仕事といふものがなければ、どんなに氣樂だらう。

物臭先生の物臭先生たる所以は、實に此に存するのである。そうして先生が仕事に取りかゝると、一時間も經たぬ内に先づ一休みして、煙草を吸ひ、こんな苦しい思をする積で世の中に生れて來た筈ではなかつたがと、溜息を吐く。

だが日曜とか祭日とか云ふと、先生もう大得意で、前日から明日は日曜日だ、まあ朝十一時迄は寢られる。午前の來客は皆斷つて呉れ。又十一時前には決して起してはならぬぞと、一切の事悉く抛遣りの先生が、日曜の朝寢坊だけは規則正しく勵行する。故に日曜か祭日などに、學者仲間の集會をしやうといふ相談が出ると、眞つ先に大反對を唱へだすのは常に此物臭先生であつた。

そこで物臭先生の子供達はどうであるか、眼の前に手本があるのだから、朝寢や晝寢は決して阿父さんに負ける事がない。長男の太郎は十三になるまで讀み書きも出來ず、小學校では毎日のやうに教師の御叱言を頂戴し、學校中大評判の懶惰者であつた。

讀者も御存知の通り、懶惰と貧乏とは親類の間柄であるから、物臭先生も追々零落して遂に可哀そうな境遇となり、こゝに始めて眼が覺める事となつたが、自

懶惰に二種あり、體力上の惡嫌勞なるもの、技藝成就得ざるもの、腦力使用考慮すること、賢ふとなる厭なもの

分は迚も見込がないから、せめて其子供だけでも相當の人間に仕立てたいと思ひ、或日長男の太郎を呼び付けた。

父太郎、お前は將來何にならうと思ふのか。

太私はどうぞ大學の學生になりたいと思ひます。大學の學生は毎日酒だの麥酒だのを飲んで、莨を吹かして居さへすれば宜いので、外に何も仕事がありませんから、是非阿父さん、私を大學の學生にして下さい。

物臭先生そこで太郎を大學の選科生にした。太郎は大學に入つてからも、無論勉强はしない、講義にも毎月一二回より出た事がない。唯毎日朝寢と晝寢と飲酒と喫煙とのみに耽つて居た。其中に年は取つて來る、頭の毛も追々と白くなり、阿父さんの物臭先生も死んで仕舞ひ、自分も流石に大學の制服を着て居る事が耻しくなつて來た。然し彼は決して志を立てゝ勉强しやうとは思はない。否、勉强は人生の最大不幸だと心得て居るのである。隨分面白い大學生もあればある者だ。

然し太郎の恃みにする所のものが一つある、それは太郎に一人の叔父があつて數年前より布哇へ出稼ぎに行つて居る。太郎窃に謂へらく、叔父は定めし澤山の金を溜めて歸朝するであらう、彼は年もとつて居るから遠からず自分の爲めに死んで呉れるであらう、そうすれば、其財產は悉皆太郎に讓つてやらうと云ふ遺言狀を書くに違ひない、そこで自分は一朝にして巨萬の富を得る譯になる、其時こそ思ふ存分寢て食つて、遊んで暮す事が出來る樣になるのであると。

嗚呼、砂の上に建てられた家が千萬年保つとしても、恐らくは太郎の空想の實現される日は來ないであらう。然し太郎は毎日叔父の歸朝を待つて居た。太郎は大學の生徒籍に在る事二十七學期。遂に營養不良の爲め殆んど餓死に等しい憐れな最後を遂げた。

第八　亂雜なる人物を養成する方法

秘訣　秩序の觀念を撲滅せよ

お秋は至つて几張面な子供で、何一つ抛遣りにした事がない。近所の人々も皆感服して、自分達の子供にもお秋を模範にしろといひ聞かせる位であつた。お秋が小學校に通ふ頃になつてからは、益〻此天性を發揮して、身の四邊は勿論、机の上には塵一つ溜つて居る事がない。お秋の此の樣に几張面になるに付ては、勿論原因があるので、それは年來此家に奉公をして居る阿清といふ下女が、非常な清潔好で、几張面であつた。之れを見て居たお秋は、子供心にも阿清に負けまいと云ふ氣から、遂に今日の習慣を作つたのである。お秋は紙一枚でも無駄にしない、如何なるものでも其置場所を變へた事がない。又母から針一本でも借りると、返す時には必ず元の針箱の同じ場所に刺して置く。足袋でも、着物でも、穴や綻びを其儘にして一日以上捨てゝ置く事は殆んどない。然し阿母さんは餘り斯かる事を好まなかつた。何となれば、お秋の注意深く且つ規律正しい爲め、自らも隅から隅まで氣を付けねばならず、隨つて頗る忙しい故である。

パーマネント　汚物は正當な物　のにあるとの謂ひ　ざらの

母　お秋や、お前の樣にそんなに物を几張面にするには及ばないよ。小さな事は成るたけ構はないで置く方が宜いよ。お前の樣に几張面だと、使はれる人などは、どんなに困るか知れやしない。

是れ母其人の言である。但し之れは果して一點の私心も挾まない所から出たのであらうか。

お秋に一人の兄がある、が、之れは頗る亂暴な性質である。お秋の留守の時は、其机の抽斗をがら〳〵搔き廻して、中から手當り次第に物を攫み出し、毫も意に介

する所がない。お秋は歸つて來て、此落花狼藉の有樣を見、泣き出さんばかりに母の所へ駈け付けて、

阿母さん、兄さんがあんなにして了ひました。

お秋は兄の暴狀を母に訴へたのであるが、阿母さんは頗る冷淡なもので、

お秋や、なにをそんなに泣いて騷ぐの？兄さんがお前の物を散らかしたら、お前が片付ければ宜いぢやないか。

お秋の訴は少しも採用されない。憐れなる彼女は最早其不平を訴へる人がないのである。

或日お秋は靴下に穴が開いたとて、阿母さんの所へ來て、

秋　阿母さん　針を貸して下さいな、自分で繕ひますから。

母　此處には針は無いよ。そんな事は今しないでも宜いぢやないか。

又もお秋は冷かなる一言の下に頭ごなしにされて仕舞つた。

お秋は遊びに行つて歸つて來た。

秋　阿母さん唯今戻りました。簞笥の鍵を貸して戴きます、着物を疊んで仕舞ひますから。

母　お前は本統に性急だね。明日でも宜いぢやないか。今夜は其處へ引掛けておき置きな。

愛すべきお秋は從順な子供である。彼は母の命令に服從すべき事を生れながらにして知つて居る。然し其服從の結果はどうであつたか。

日を經るに從つて、机の上には塵が溜つて來た。汚れた手巾や穴の開いた足袋は、どん〳〵紙屑籠の中へ投げ込まれた。鍵裂きや綻びのある着物を着て、お秋は無頓着にも衆人の間に出入する樣になつた。最早學校の先生もお秋を以て皆の

模範とは云はない。近所でも寧ろ墮落娘との評判が立つ樣になつて來た。斯くしてお秋が嫁に行つた後の模樣はどうであつたらうか。

座敷は古着屋の樣で、玄關は古靴古下駄の商賣をして居る樣で、臺所は蜘蛛の巣に蔽はれ、障子襖は破れ、疊は汚れ、宛然化物屋敷の樣である……。母親の感化力は何と偉大なものではないか。

第九　不器用なる人物を養成する方法

秘訣　兒童に過度の保護を與へよ。

うら〳〵と長閑な春の日影を浴びつゝ、公園の木の間を男女二人の子供を連れて散歩する夫婦がある。

秀子や、そんなに襟を開けて居ると風を引くよ。

不器用とは筋肉を十分に統裁する能はず、

身體四肢を熟圓に動作する能はず、之に要する不足力なのか、若くは不足なるか、もしくは無益の點に消費して其企畫を完うすると能はざるものを謂ふ

と母親は小走りに走り寄つて、秀子の身繕ひをしてやる。

武雄や、帽子を取つて居ると日が當つて頭痛がするよ。

と父親は武雄の水兵帽をかぶせてやる。

麗かなる春のけはひにも、子を思ふ親心、少しの餘裕もなく、子供の世話を燒いて居る。其心の程こそ實に有難いものである。之れは當時歷々の教育家で、子煩惱の名が高い某氏夫妻である。

秀子は最早十二三歲であらう、眼のぱつちりとした、髮の眞黑な、怜悧さうな女の子である。然し見掛にも似げなく、下駄をはくのでも、羽織を着るのでも、一切母親の手を待つて居る。武雄も八九歲であらうが、之れも同樣起居進退、總べて父親の手を假りてする。自分一人で出來ない程でもあるまいに。

そら泥溝がある、落ちると可けないぞ……そら車が來た、早くお避け！

之れは亦此一隊が散歩から歸る途中であるが、或は抱き上げたり、或は手を執つたり、父母の心配は實に一通りではない。

此夫妻が子供を遇する方法は萬事かういふ鹽梅である。餘り世話を燒き過ぎるのは不利益である事を忠告する人があると、教育家を以て自ら任ずる父親は、凡そ兒童は無能力者である、父母は飽くまでも懇切に之れを保育しなければならないと言つて、一向取合はない。

毎日朝から女の子の髪を結うたり、顏を拭いたり、靴を穿かせたり、着物を着換へさせたり、兩親の忙しい事非常なものである。萬事が此の通りであるから、子供等は益〻增長して、終には獨りでは帽子も被らない、袴も着けないといふ樣になり、秀子は娘盛りになつても、着物の綻び一つ直す事もしない。否、したくも出來ないのであらう。

斯くて子供等は少しの用向きでも父母や召使に賴んで、縱の物を横にする事もしない。餘儀なく子供等に一人宛の下婢を附けなければならぬ樣になつた。而も手が殖えれば用向きも益〻增加する勢で、母親の如きは目が廻る程忙しい。滌ぎ洗濯、綻びの繕ひ、さては臺所の煮焚まで、殆んど手の休む時とてはなく、父親も時々母親の手傳をしなければならない位で、家を擧げて子供等の奴僕と異る處がないと云ふ有樣。

阿母さん、前垂の紐が解けました、結んで頂戴。

阿父さん、靴が脫げた、穿かして頂戴。

嗚呼、これが十四五になつた秀子や十一二になつた武雄の口から聞く聲である。兩親の忙しいのも無理はない話である。

或日細君の姉さんが訪ねて來た。細君は子供の世話で、碌々姉さんと話をする

事も出來ない。姉さんは餘りの事に呆れて、細君に向ひ、

姉　子供の事はお前さん、好い加減にしたら宜いぢやないか。

細君の頰には早涙の雫が傳つて來た。

細　姉さん、妾は朝から晩まで子供の世話で、些とも樂が出來ないのです。夜になると身體が痛んで、これぢやもう迚も長生きは出來まいと思ひますの。

姉　お前さんの家には、大勢召使が置いてあるでせう。お前さんがそんなに忙しいと云ふのは妾には譯が分らないよ。

細　そうです、四五人も召使が居ますが、大勢の子供で、其世話ばかりでも中々手が屆き兼ねるのですよ。

姉　子供達も、もう大抵大きくなつて居るぢやありませんか。女の子などは今の内に少しは家の手傳をさせて置かないと、後々の爲になりませんよ。そうしてお前さんも些と樂にした方が宜いぢやありませんか。

細　中々そうは行きません、裁縫とか煮焚とか、子供の汚す衣服を洗濯するばかりでも、大抵ぢやありませんもの。

姉　お秀さんは幾歳になりなすつたの。十六でせう。十六にもなつて、自分の事を自分で始末する事が出來ない樣ぢや仕樣がありませんよ。自分の事ばかりでなく、少しは妹や弟の世話位させても宜いでせう。お前さんの樣に、幾歳になつても子供を赤ん坊みた樣に思つて居ると、それこそ子供達の爲になりませんよ。

細　秀子はまだ鍵裂き一つ繕へないのですもの、どうして妹や弟の世話なんぞが出來るものですか。

斯の如くにして過度の保護は、兒童をして首尾よく不器用な人と爲し了つたのである。

第十　訓戒を蔑視する惡習を養成する方法

秘訣　絶えず訓戒を與へて兒童の感覺を遲鈍ならしめよ

女學生上がりの或細君は、兼て考へて居た理想的の育兒法を實行した。細君謂へらく、兒童は理性も思考もないもの故、若し其欲する儘に之を成育させると、其こそ野獸と同樣な者になるに違ひない。親の役目は卽ち之を防ぐにある。するには絶えず兒童に注意と訓戒とを與へなければならぬ、而して訓戒が多ければ多い程、効能も多い筈で、其理由は數理的に明白なる事であると。斯くして細君は其子供に、世間の子弟等より遙に多くの訓戒を與へたが、其煩多にして綿密なる事、實に驚くべき程である。細君は朝から晩まで子供等に向つて、

御前達は穩順くしなさい、兄弟喧嘩などしてはなりません。又平常の樣に泣いてはいけません。御客樣が入來しやつたら叮嚀に叩頭をしなければいけません、御客樣に行儀の好い子だと褒められる樣になさい。又何時もの樣に學校の歸りに往來で遊んではなりません。車も來るし、馬車も來るし、險呑でならない。お前は時々指を口に咬へて居るが、そんな眞似をして居ると人に笑はれます。そうして着物を汚さない樣に氣を付けなさい、餘り汚すともう拵へて上げません。口の中にさう物を頰張つてはいけません。御飯はさう急いで喰べるものぢやありません。よく嚙まないと消化が惡い。御飯は決して逃げませんから、御飯の時には大きな聲で、御飯！　だの、御菜！　だのと、怒鳴るもんぢやありません。叮嚀に「御母樣どうぞ御飯を下さい」と、いふものです。そんな容姿をしてはいけません。一體そんな眞似は何處で覺えて來たのです。下女の樣な眞似をして、下女奉公でもしたいのですか。決して之れからそんな事をしてはなりま

精神的刺激受激感受すると甚だ鈍く肉體的苦痛感知すると亦概ね弱く鈍ふと云遲のなるもの

せんぞ。お前達には斯うやつて朝から晩まで、口を酸くして小言をいふが、何時も馬の耳に念佛といふ風です。今度親の言ふことに背いたら、吃度酷い目に遇はせますから、其積りでおいでなさい。

小言の云ひ方は一寸こんな風である。のべつ幕なしで、恰も竪板に水を流すが如くに饒舌り續ける。扨て其結果は如何であらうか。

凡そ如何なる良藥でも、毎日服用して居ると、遂には其效力を失ふものであると云ふ事は、醫者でなくても、誰でも承知して居る事であらう。教訓も卽ち之れと同じ道理で、毎日毎晩聞き慣れると、終には其有難味がなくなるのである。記者が曾て深山大澤の間を跋涉した比、或山中で一人の炭燒爺に出遇うた。記者は彼に向つて、「此邊は實に佳い景色だ、此處に住んで居るお前こそ、誠に天下第一の幸福者である」と云ふと、炭燒爺は不審顏で答へた、「なあに、佳い景色であるものですか、私どもはせめて半年でも宜いから、都に住んで見たいのです」と。

實際と妄想とを外見ばすを取り繕ひて

總て教訓の內容は如何に善良でも、絕えず之れを聞いて居れば、此炭燒爺の景色觀と同じ樣になる。子供に對して何等の效能もないのは、寧ろ當然の話である。後には此母親が小言を云ひ出すと、子供等は互に目と目を見合はせて笑ふ樣になつたとの事である。

第十一　虛飾を好む人物を養成する方法

其一

秘訣　早くより虛飾を奬勵せよ

琴子は大切にして居た人形を嫁に行く時實家に置いて行かねばならぬ事となつたので、一方ならず力を落した。併し嫁に行くと、間もなく此人形よりも可愛らしい玉の樣な女の子が生れたので、琴子の喜びは譬ふるに物がない。未だ產褥に

自己の精神及び身體の他に卓越せんことを誇示するを虛飾と云ふ

ある時から琴子は考へた、赤ん坊には何んな着物を被せたら宜からう、何んな帶を締めさしたら似合ふだらうと。蓋し琴子は我が子の事を全く實家に置いて來た人形同然に考へて居たものと思はれる。斯くして其子お玉が三歲になつた時、最早紋付の振袖に、疊付の駒下駄と云ふ扮裝で、諸所を伴れ行き、獨り自ら悅んで居た。若し他人が、「令孃は全で人形の樣です」などゝ世辭を云へば、琴子は得意の鼻をうごめかして、さも滿足の體であつた。

然しお玉は、頗る優しい溫順な性質で、殊に慈悲深い子供であつた。彼は母より菓子抔を貰ひ受くれば、其一半を近邊の貧民の子供に分ち與へるを常とした。又繪紙やお伽双紙などを見る事が好で、母より其說明を聞くのを以て無上の樂みとして居た。然し母なる琴子は、斯樣な事は大嫌ひで、唯お前の頭にはお稚子が似合ふの、お前の着物には、洋服の方が宜いのと、暇さへあればお玉に化粧をさせる。やがて化粧が濟めば、今度は鏡の前に連れて行つて、一時間も立往生させる。

斯かる敎育法は、お玉をして漸々虛飾は人生第一の必要條件で、又幸福の淵源だといふ觀念を起さしめたのである。猫や犬は衣服を着飾り脂粉を用ふる必要はないが、人間は大に其必要がある、之れが人間と動物の異なる所以であると。

お玉は脂粉を施さない女子を見ると、田舍者だと嘲り、美服を着けない人を見ると、賤民だと輕蔑し、前に貧者に對して表はしたる慈悲深い優しい心は、今や全く消滅するに至つた。寶石の指環と金の時計は、お玉が學問や技藝よりも遙に重んずる所で、京都から來た友禪染は、お玉が貞節よりも貴きものとなつた。尤も母なる琴子は、之れに對して毫も異存なく、寧ろ富者の子たるに適當の事と考へて居た。

さてお玉の將來は如何であつたか。彼は香水の良否を判斷する能力を持つて居たが、襯衣一枚裁縫する事が出來ない。縮緬や緞子の善惡を鑒別する眼識はあつたが、良人を慰めるに足る料理の拵へ方を知らない。否、知らないのではない、己れの衣裳に對する注意の爲め、良人を思ふの暇がないのであつた。嗚呼同情の涙に滿ちたお玉の心は、遂に其芽を切られ、其根を斷たれて仕舞つたのである。其罪は我が子を人形の樣に弄んだ母の琴子にあるは無論である。

其二

秘訣　盛裝を凝らして兒女を衆人の間に出入せしめよ

チリン〳〵〳〵……

授業開始の鐘の音と共に、花に狂ふ蝴蝶の如く、霞の中を飛び交ふ球の行方を逐うて居たテニスの一群も、築山のあたりに菫の美しい薫を愛づる三四の束髪連も、今は皆立ち上つて教場に這入つた。海老茶も紫も、皆跡を絶つて、空漠たる運動場は寂として人影を見ない。

倫理教室の戸を排して、どやく〳〵と這入つて來た三四十人の一群は、各自所定の席に着き、其視線は一齊に講壇の上に立つて居る老先生に集まつた。神々しい白髭を撚りながら講話する先生の言を、餘念もなく聞いて居る妙齢の令孃達は全然で星座を回る天使の樣である。無論之れは東京の或る高等女學校の倫理教室で、お花も聽講者の一人であつた。老先生は徐ろに、

皆さん！皆さんは心を美しくすると云ふ考へが肝腎です。身分不相應に外觀の美を裝ふが如きは、罪惡の一として避けなければなりません。女子は兎角に裝飾に心を用ひるものであるから、皆さんは努めて其邊の事に注意しなければいけません。縱令美しい衣裳に外觀を飾るとも、心が美しくなければ何も役に立

ちません。如何に青紫紅白の美觀を極めても、造花は何處までも造花です。匂もありません。香もありません。隨つて眞髓を極むる事が出來ません。野に咲く百合の花は、縱令茨の中に咲いて居ても、天地の美を極めて居ります。皆さんが女子として他日人に重んぜらるゝ所以は、皆さんの指頭に金剛石が輝いて居る爲めではありません、唯心の美しい爲めなのです。即ち節操、愛情、慈悲、柔和などの德性を具備へて居る爲めなのです。如何に千萬金の裝飾でも、之れは畢竟浪費の不德を代表するに過ぎないのです。皆さんも決して斯かる不德に尊敬を拂はないでせう。如何に脂粉を施しても、結局それは人工の美であつて、天然の健康から出る紅の頰の眞に人間の美を成すには、とても及びません。斯く觀じ來れば、裝飾は人間に毫も益する所がありません。否、却つて人間の品位を下げるに過ぎないものと思はれます。皆さんも能く女子の守るべき道を修め、美服を纏ひ外觀を修飾する事などに心を傾けない樣になさるのが必要です。斯くすれば世間の人も皆さんを尊び敬ふやうになります。皆さんが是非とも左樣心掛けられん事を私は希望致すのであります。

滿場唯森として水を打つた樣である。無論お花も之れを熱心に聞いて居た。否、其小さなる胸には、一道の靈光を浴びせかけられたのであつた。お花は家に歸つてからは、唯學業を勵み品行を愼み、決して身の裝飾などに心を傾くる事がなかつた。されば母親も之れと云うて非の打ち處もなく、一口の小言も云つた事がなかつた。

然し母親は全然お花の主義に贊成したのではない。女心の淺ましさは、寧ろお花に就て別に希望する所がある。それは云ふまでもなく、お花が妙齡になつても、餘りに無頓着で、身のまはりの裝飾などに少しも意を用ひないのが不平なのであ

る。母親はお花を美麗に飾り立て、諸所の集會などに連れて行つて自慢したい心底であつた。

或日母はお花を呼んで云ふには、「お花や、お前も少しは世間を見ないと後の爲めにならないよ。そう〳〵學校の仕事ばかりしないでも宜いだらう」と、厭がるお花を強ひて何々倶樂部とか云ふ淑女紳士の會合する場所に連れて行つた。お花は固より學校に行くと同樣の服裝であつたが、會場に這入れば綺羅錦繡に纏はれて居る人々のみで、お花の如きは田舍者として、少しも衆人の顧みる所とならない。のみならず中には袖引き合うて、お花の粗末なる風采を嘲笑ふ令孃達もあつた。お花が不愉快を感じたのも無理はない。

虛飾者の擧動は愚者の其智を衒ふと相距ること甚だ遠からず

母は復た次の集會の時、お花の辭するにも拘らず之を同伴した。お花も今度は前回の不快なる經驗に懲りて、他所行きの衣服を着けて行く事とした。母親は心窃に手を拍つて喜んだ。無論此度は前回に比して、幾分か人の注目する所となつたのである。

次の集會には、お花の方から母に向つて同行を希望し、尙衣服は何々を用ひたいと申し添へた。母親は時こそ來れとて新調の美服を着用せしめ、意氣揚々とお花を同行した。斯くして集會へ出席することの度重なるに隨ひ、お花は漸く其姿を美しくする事に力を用ひ、全く以前とは生れ變つた樣になつた。

髮は流行の束髮、ショールは舶來新着の何織り、香水は佛蘭西流行の何印、帶地は京都で新規織り出しの何々……明日は白木屋の賣出し、明後日は越後屋の開店……。母親は唯々諾々お花の請ふが儘にしてやる。金の指環、寶石入りの留め針、是れ等はお花の手箱にいくらも轉がつて居るやうになつた。

或日お花は姿見の前に立ち、つく〴〵と之れに映ずる姿を見て恍惚として居た。

此時ほどお花は自己の容色と風采との價値を感じた事はなかつた。斯くして彼は遂に交際場裡の眼を惹く第一の令孃となり、其一顰一笑は若い紳士等の心を傷ましむる材料となつた。お花自らも交際場裡の女王を以て任じ、之れを以て無上の光榮と自信して居た。嗚呼お花が嘗て學校の講堂に於て感得したる一道の靈光は、今や惡魔の誘惑に因つて、全く其光明を失つたのである。「今後萬望御交際を願ひます」といふ若い紳士の慇懃なる挨拶は、白髯の老師の言と違ひ、一種異樣の快感をお花に與へたのである。是れは春の夜の微風の如くにお花を醉はしめ、彼れは冬の曉の寒風の如くにお花を戰慄せしむるのであらう。

最早お花の腦裡には學問も品行もない。學校に行つても夢路を辿るが如く、教員の熱心なる教訓も更に何等の印象を與へない。

或日先生は例に依つて講義を始めた。

凡そ過去の生活を顧みて、少しも疚しい事のない人は殆んどなからう。然し過去を顧みて、己れの缺點を見出し得る人があるならば、其は取りも直さず最大の幸福を有する人間で、所謂盛德の君子人となる事が出來るのである。古人の云ふ如く、日に三省して我身を愼む事が人間の最も大切なる事で、之れが出來る人は又最も幸福なるものと云はなければならない。人間は兎角に過ちに陷り易い。又誘惑にもかゝり易い。誘惑に出遇ふ人は宛も急流を下る舟の如く、進み行く間に風波に掀られて難破するのである。而して罪惡の海は大いなる口を開けて覆沒者を待つて居るのです。

と云ひながらお花に向ひ、

どうです、貴女は覆沒の恐ろしい事を知つて居ますか？

突然の質問にお花は驚いたが、何を答へていゝのやら判らない。彼は修身の時

裝飾粧は虚飾の一大元素にして此弊は殊に女兒に多しとす

間に出席して居たが、修身の講義は耳に這人らなかつたものと見える。

お花は或時次の樣に朋輩に話したそうである。

妾は家に引き籠つて居て、唯家庭の快樂を得る丈けでは滿足が出來ません。家庭の快樂といふ事は、吾々のみならず貧乏人でも日傭取でも、家庭のある人は、得る事の出來るものです。家庭以外の人を樂ませ、自分も亦家庭以外の人から持囃され、そうして社會から名譽と稱讃を受けるのが自分の希望で、そうなれば妾は滿足するのです。

と。之れを簡單に云へば、お花は唯世間から持囃されたいといふ事に歸着するのである。言ひ換へれば虚榮を購うて一身の慾望を滿足させたいと云ふに過ぎないのである。されば虚飾を事とするはお花の目的を達する手段で、價の貴い衣服と金剛石の襟留めとは、卽ち必要缺くべからざる材料である。然し母親は之れを見

終日鏡面に對して自ら其美を嘆する如きは卽ち一種の虚飾たるを免れず

て喜んで居るのであつた。彼は恐らく自家教育法の巧妙なるを自ら誇つて居るのであらう。

お花は學校の仕事を全く放棄した。成績などは無論少しも意に介さない。其の結果落第に落第を重ね、遂に退校する事となつたが、お花は獨り喜んで云ふには、是で豫ての希望通り交際場裡に乘り出して、大目的を成就する事が出來るのであると。

是より後は、多人數の集まる所へ押し出して行くのがお花の專門の仕事で、殊に若い紳士等の集會とあれば、殆んど缺席した事がない。お花は又裝飾の爲め必要とあれば、如何なる高價なものでも費用を吝まず購求めた。啻に費用を吝まないのみではない、身體の健康も心の安靜も、擧げて犧牲としたのである。例へば姿勢の外觀を美ならしめんが爲め、嚴寒中薄着をして感冒に罹る事もあり、又夜

「伊達の薄衣」とは虚飾を事とするもの丶愚を云ふ

會の服裝に付き、夜の目も合はせずに工夫を凝らして、翌日頭痛を惱む事もある。而もお花は斯くして其女子としての天職を全うする事が出來ると考へたのである。

お花を嫁に貰ひたいとて緣談の申込は、毎日十軒も二十軒もあつた。で、とう法學士某君と結婚する事となつた。結婚の後十日許りは、夫婦仲も至つて睦しく、誠に愉快な生活をして居たが、然し二週間三週間と經つ内に、お花が化粧の外、朝から晩まで、なに一つ爲す事もなく遊び暮すのを見て、法學士某君少しく不快を感ずるに至つた。而して一月二月となるに隨つて、此感情は一層程度を高めた。固より一生連添ふ妻の事であるから、某君も時々注意を與へて、將來を戒めたが、其度ごとに泣聲が聞えて、夫婦の間兎角圓滑を缺く有樣であつた。某君の考では、凡そ妻たるものゝ務めは、家庭を主宰し、人間最大の幸福である家内の平和を鞏固にし、家政を整理し、一家團欒の樂みを基けるにありと云ふのである。然るにお花は固より之れと意見を異にした。何と吾が夫は吝な了簡を持つて居るではないか。自分の働く範圍は僅に夫の一家内に止まり、自分の意見は夫の爲めに一々制肘される。斯んな詰らない事はない。自分は一家内の小事にのみ齷齪する女ではない。社會を相手にして、社會から尊敬されるのが自分の希望である。又自分の行動は社會の判斷に基いて左右さるべきものであつて、夫一個の意見を以て彼是定むべきものではないと。玆に主義見解の衝突が始まり、醜聲動もすれば、戸外に漏れ、夫婦の間兎角圓熟しない。而してお花は死に至るまで其意見を確守し、夫に反抗したのであつた。其臨終の時ですら、「帝國ホテルの夜會は實に面白かつた、來月は華族會館の舞踏會だ」などゝ、夢中に口走つて居たのであつた。

己れの意思を飽迄も主張し、己れの主義を遂行する爲めには、敢て一身を犧牲

にするを恐れない、況んや夫の意見の如きをや、といふ事が善いとすれば、お花は豪い女であつたかも知れない。然し人間としての義務も、妻としての義務も、一身の安靜も健康も、彼女は悉く放擲して顧みなかつたのである。又虛榮を得るに汲々として、遂に人生一切の快樂を得る事が出來なかつたのである。實に不幸の極みと云はねばならない。彼女は社會の尊敬を受けんとした結果、却つて社會の嘲笑を買ひ得たに過ぎないのであつた。高等女學校の白髯の先生の講義は、宛もお花の一生涯を豫言したかの如くであつた。お花の生涯は全く誘惑の海に浮んで、其大なる口に呑込まれて仕舞つたのである。虛榮虛飾浮雲の如き生涯は、斯の如くして玆に其終焉を告げたのであつた。

然し諸君よ、願はくは同情の涙を此憐れなるお花の生涯に濺ぐを禁じ給ふな。お花が其幸福を呪はざるを得ざるに至つたのも、之れは全くお花の母の教育が然らしめたのである。但し其愛する子女を地獄の焔の中に投ずるものは、獨りお花の母親のみに限らない樣である。

第十二　偏狹なる人物を養成する方法

秘訣　兒童に對して偏頗なる待遇を爲せよ

どうも家の玉枝にも困ります。あんな偏屈な子は世界中にありやしないと思ひます。何か一言云ふと直きに口返答をし、小言を云へば恐ろしい顏をして私を睨め付け、本統に手の着けやうのない子です。

之れは玉枝の母親が、其兄なる人に訴へて居た話の一節である。然し兄なる人は、玉枝の最も無邪氣なる愛すべき子供である事を能く知つて居るのである。それ故に此話を聞いて不審に思ひ、

まあ、少し我慢をしておいでなさい。其内に私も玉枝の樣子を見屆けて、何とか工夫をして上げるから。

と、母親を慰めた。

玉枝の母親は德子と云つて、中々の交際家である。日々來客もあり、又自分も訪問に忙しい程である。或日德子夫人は、誕生の祝にとて、數名の客を招き、同時に其兄をも呼んだ。元來德子に三人の女の子があるが、其中二人は標緻も頗る好く、見る人が皆褒める程である。然し二人とも中々のお轉婆で、お饒舌で、來客の前などでも隨分傍若無人の振舞をする事があるが、其處が標緻の好い德で、却つて愛嬌ものだの活潑で宜いのと、褒め讃へられるのである。さて又此二人の間にある玉枝はどうかといふに、標緻はいかにも姉妹の中では劣つて居て、他の二人に比較べると、牡丹に菖蒲位な相違は確かにあるが、其性質は頗る穩順で内氣で、誠に女らしい處がある。

玉枝は標緻の劣つて居る悲しさ、兎角人に疎んぜらるゝので、母親も亦二人の姉妹のみ綺羅を飾らせ、玉枝は措いて顧みないのである。で、玉枝の衣服は頗る粗末なもので、一見母の着古しを仕立直したといふ事が判る位である。それで誕生日の來客は、皆美しい二人の姉妹を稱讃するが、客室の一隅に悄然として佇立んで居る玉枝には、誰あつて同情を表する者はない。時々玉枝の耳に入るものは、母親の嬉々として姉妹の兩人を褒め立てる聲である。玉枝は首を俯垂れて涙ぐんで居る。是れが果して眞實の親子の情愛であらうか。小心なる玉枝は姉妹の褒めらるゝを聞き、宛も己れが譏らるゝ如く感じて居たが、遂に堪へ難くやありけん、突如として戸を排し一散に駈け出した。

母親は此有樣を見て兄に向ひ、

御覽なさい、あの通ですから本統に困つて仕舞ひます。

然し兄は先刻から母親の擧動と玉枝の容子を見て、心中頗る不快を感じて居たのであるから、直ぐ德子を隣室に呼んで、

兄　お前は實に無慈悲な阿母さんだ。

母　え……何が無慈悲です、何時無慈悲な事をしました。

兄　お前は子供に對して無慈悲だ。殊に玉枝に對しては此上もない無慈悲だ。

母　兄さんの仰有る事は少しも分りません。もつと判然其譯を云うて下さい。玉枝は御客の前も憚らずに、突然に出て行きました。斯う云ふ事は嚴しく折檻しても宜いのですが、可哀想だと思つて其儘にして置いたのです。兄さんの無慈悲といふのはどう云ふ譯なので御座います。

兄　お前は篤と考へて見るが宜い。玉枝は他の姉妹ほど、標緻が好くないから、

僧む所を
斥け
好む所を
揚ぐること、
一方を
溺して
偏愛
頗る
取扱の
爲なす

せめて着物の奇麗なのでも被せて、惡い所を補つてやらなければならない。然るにお前は何と云ふ事だ、玉枝には襤褸を着せながら、他の子供には立派な扮裝をさせて置くではないか。如何に子供とはいへ玉枝も今年十三だ、お前の偏頗の措置が分らずに居られませうか。御客樣が見ても、直ぐ繼子扱ひだと云ふ事が分ります。元來性質から云へば、玉枝の方が餘程よく出來て居る子だ。然るにお前のやり方は、益〻玉枝を僻んだ人間にするのだ。玉枝は如何に母を恨んで居るでせうか、又如何に姉妹を羨んで居るでせうか、實に可哀想な子だ。お前は又實に無慈悲な親だ。一刻も玉枝をお前の側へ置く事は出來ません。今日から私が玉枝を預ります。

と、兄は玉枝を引取つて、我娘の如くに養育した。日ならずして玉枝の偏狹なる精神は全く拭ひ去られ、實に愛すべき天眞の少女となつた。

第十三　疑念深き人物を養成する方法

秘訣　兒童に對して虚言を弄ぶべし

義一郎に禮二と云ふ弟が出來た。義一郎は不思議に堪へない。そこで父に向つて、

阿父さん、禮二は何處から來たの？

父親は口から出任に、

禮二は山から飛んで來たのだ。

義一郎は更に疑惑の雲に蔽はれた。

どの山から飛んで來たの？

そうだね、阿父さんが飛鳥山の公園へ散歩に行つた時、大きな松の木の上から飛んで來たから連れて來たのだ。

義一郎は成程そうかと思ひ、早速姉や朋輩に其事を告げた。姉は其を聞き、腹を抱へて義一郎の愚を笑ひ、且つ禮二の山から飛んで來たのではなく、阿母さんのお腹から生れ出たものである事を話し聞かせた。

此時以來、義一郎は父親の言ふ事を少しも信用しない。父親が如何に眞面目に話をしても、義一郎は中々承知しない。

阿父さん。嘘でせう、禮二は山から飛んで來ませんもの……

斯くて義一郎は、己れの父親すら信用する事が出來ない故、他人は猶更信用するに足らぬと思ひ、如何なる事にも疑念を挾むやうになつた。

第十四　父母を輕んずる惡習を養成する方法

其一　秘訣　父母の不品行なりし事を知らしむべし

何某と云ふ人があつたが、宴會等で一杯傾けると、雄辯滔々前後も關はず過去の自慢話をする癖がある。勿論斯かる人の例とて、感心する程の話は一つもない。例へば自分は若い時には隨分遊んだもので、道樂は殘らず爲し盡したとか、子供の時にかう云ふ機智を弄して、母親の巾着を取り出したとか、旅行先で斯樣々々の惡戯したとか、みんなかう云ふ類の話で、之を如何にも得意に吹聽するのである。

元來斯樣な話は、子供等には頗る面白く聞える故、皆々熱心に耳を傾けて傍聽する。父親は毎も子供等に向つて、

若い内には色々不都合な事もあるものだ。年を取つてから不都合な事をしてはならないが、若い内は先づ大概の事は大目に見て居なければならぬ。

と、さも言譯がましい事を附加へるのを例とする。それで子供は直ちに次の如く に推測するのである。即ち自分等は無論若い、若い内の事は大目に見て置くといふ事であるから、少し位な惡い事はしてもかまはぬと。

父親が子供等に意見すると、子供等は異口同音に答へる。

阿父さんも若い時には斯樣々々の事をなさつたと、御自分で御話しになつたではありませんか。

斯くして父は其兒に對して少しの威嚴をも保つ事が出來ず。其命令は悉く輕視せらるゝに至つた。

其二

秘訣濫りに命令を下して其實行さるゝや否やを問ふこと勿れ

似た者夫婦と云ふ諺があるが、此家の夫婦は實に其適例であらう。父も母も共に子供に對して頻りに嚴命を下すのであるが、未だ嘗て其命令の行はれた例がないのである。それは家庭に就いて少しく内情を探つて見ると、容易に其理由を發見する事が出來る。

母親は朝起きると直ぐに子供等に向ひ、

お前達は一處に座敷の掃除をなさい。床を片付けなさい。机の上を取り散さない様になさい。學校から歸つて來たら何處々々へ使に行きなさい。

と一々命令をする。朝飯を終ると復た直に幾十の命令が雨下する。而も其實行されるや否やは、嘗て問うた事がない。故に座敷は依然として下婢に依つて掃除され、床は依然として母に依つて片付けられ、机の上は依然として取り散らされ、使に行くべき時には子供等は皆遊びに行つて居て歸らないのである。

子供等はドヤ〳〵と遊から歸つて來た。入口の格子も座敷の障子紙襖も手荒く開閉せられて、凄じい音がする。宛も家居が鳴動する如き騒ぎである。母は叱る、然し鳴動は止まない。其處で父親が出て來て、

お前達はなぜそんなに亂暴をする、今一度そんな事をすると承知をしないぞ。

と。然し子供等は笑つて居る。蓋し父親は常に今一度〳〵と云ふが、未だ一度も實際承知をしない事はないのである。故に父親が怒れば怒る程子供等は笑ふのである。

かゝる有樣故、兩親は殆んど兒童鎭撫の方法に窮したのである。

母親は一策を案じて、

若し御前方が穩順くして呉れゝば、屹度御褒美をやるから。

と。利に敏き子供等は此に於て暫らく靜肅にして今か〳〵と褒美を待ち構へて居た。然し母親は遂に之を與へない。子供等は甚しく失望して寢に就いたのである。

翌朝起き出づるや、妹は平常の通り母親の命を用ひない。そこで兄は妹に向ひ、

お前は御褒美が貰へないぞ。

と。妹は平氣で、

阿母さんの云ふ事は當てにならない、何時でも嘘なんだもの。

之れを聞いた母親は、流石に自ら耻ぢたと見えて、翌日兄には帽子、妹には簪を與へたが、兄は妹と顏見合せて、

阿母さんのいふ事はきかなくつても、御褒美は矢張り貰へる。

と、其後子供等は一層父母の命令を遵奉しなくなつたそうである。

其三

秘訣　父母を狂犬や人買ひと同視せよ

某家の細君は、子供を叱る時に下の如き口調を用ひるを常とした。

そんな惡戲をすると阿父さんに申上げますよ……

そんな惡戲をすると狂犬に食はせますぞ……

そんな惡戲をすると人買にやりますぞ……

子供等が喧嘩をすると直ぐ此等の言葉が發せられ、子供が騷ぎ廻ると直ぐ阿父さんと、狂犬と、人買の三者が引き合ひに出されるのである。そこで子供等は、父を以て狂犬の如く又人買の如くに忌み嫌ふ樣になつた。

又子供等が母親に向つて、

今、阿父さんに叱られました。

と訴へると母親は、

さうかい、それは惡い阿父さんだね。此お菓子を上げるから泣かないでおいで、後で阿父さんを叱つてあげるから。

と、かう云うて宥める。子供は父親を以て狂犬の如く又人買の如くに思ひ、なほ又母親よりも弱いものと考へ、追々父親を輕視して其命令を用ひざるに至つた。

是れ等は甚だ些末な事例であるが、其結果は決して輕視すべきでない。然もかかる事實は、動もすれば世間に於て目擊さるゝ所である。父母たるもの須らく注意すべし。

第十五　仲の惡き兄弟を養成する方法

秘訣　兄弟の一方を偏愛せよ

達一郎と達二郎とは一つ違ひの兄弟であるが、其性質は全く異つて居る。達一郎は頗る活潑な愛嬌者であるが、達二郎は寡默で眞面目な子供である。達一郎は能く笑ふが、達二郎は能く怒る。達一郎は極めて樂觀的であるが、達二郎は寧ろ悲觀的である。

達一郎の希望に對しては父母に於て容易に許諾を與へるが、達二郎の請求は兎角に理窟ケ間敷いため、三度に一度は拒絶される有樣であつた。

斯かる性質の相違がある爲め、達一郎は到る處歡迎を受けるが、達二郎は兎角敬遠される。達一郎が學校朋輩に取卷かれて遊び戯るゝ時、達二郎は一人仲間はづれとなつて孤立の姿である。此狀態は家庭に於ても亦同樣に行はれ、父母の愛は兎角達一郎に傾き、達二郎は自然疎外される有樣である。

父母の兄弟に對する偏愛の狀態は、其言語の端にも現はるゝのである。

達一郎や、どうぞ此コップへ水を一杯注いで來て頂戴。

達二郎、お前は井戸へ行つて手桶に一杯水を汲んで來なさい。

達一郎や、着物を汚しては困るよ、少し氣を付けてお呉れ。

達二郎、なぜそんなに着物を汚して來たのだ、今度汚すと後は拵へてやらないぞ。

達一郎は菓子を貰ふ、然し達二郎は貰へない。達一郎の不都合は一寸叱られよ

ば濟む、達二郎の過ちは針小棒大に苛責される。達一郎は父母と手を携へて散歩

に出かける、達二郎は常に留守居役で獨り呻吟して居る。

達二郎は日增に不愉快を感ずるに至つた。隨つて兄の達一郎を仇の如くに考へ

た。達一郎の喜悅は達二郎の不快で、達一郎の不快は達二郎の喜悅であつた。平

常笑ふ事のない達二郎が愉快そうに笑つた時は、達一郎が母から貰ひ受けた美麗

なるインキ壺を過つて打ち壞した時であつた。

兄弟の不和は日を追うて其勢を加へて來た。當初は双方共に多少讓歩して居た

のであるが、遂には一大破裂を惹き起して騷擾を始める事が屢ある。

達二郎は種々の工夫を凝らして兄に損害を加へんと欲し、或は兄の書物を隱匿

し、或は兄の道具を破壞した。達一郎は之れを見て大に憤慨するが、腕力の優勝

なる達二郎は、却つて達一郎を壓服して、毎も凱歌を奏するのである。斯かる衝

突は一日も止む時がない。

母親は大に嘆息して、

どうして兄弟仲がかう惡いのだらう。

父親も大に心配して、

己れが死んだ後はどうなる事だらう。

と、嗚呼、恐るべきは父母の偏愛である。

＊　＊　＊　＊　＊

聰吉は怜悧なる子供で、父母の機嫌を取る術に長じて居る。然しなか〳〵奸智に長けて居るのである。兄の處置が氣に入らぬ時は、窃かに父母に向つて有らぬ事柄を密告する。兄は爲めに寃罪を蒙つて、父母の苛責に遇ふのである。

兄が善い物を所持して居ると、聰吉は窃かにそれを打碎き、或は公然それを占領する。兄は悲みに堪へずして泣き叫び、父母に其救濟を求める。母親は之を聞いて云ふやう、

そればかりの些細の事に、何も大聲を出すには及ばない。お前はそんな玩具は三日も持つて居ると飽きて仕舞ふのではないか。それだから聰吉に壞されても惜しくもないだらう。又聰吉が欲しいと云つたら、ズン〳〵やつた方が宜いのだ。二三日たてば聰吉も飽きて返すから。

一方に貶して一方に賞賛すること、弱を抑へ強を擧ぐること、長者を愛すること、少年を過ること、是れも父母の最

嗚呼、不正の侵害に對する訴訟は實に此不道理千萬なる判決を受けるのである。兩人の爭は年長者たるの故を以て常に兄の敗訴に歸するのである。而も非理は聰吉にあるは明白の事實である。裁判官たる父母は恐らくは聰吉の無形の賄賂に動かされて居るのではあるまいか。

人間は凡て道理を主張しやうと云ふ精神を持つて居る。若し道理を主張するに正當なる手段がなければ、暴力に訴へても之れを貫徹しやうといふ決心が起る。佛蘭西の革命だとか、亞米利加の獨立戰爭だとか云ふ大事件も、騷ぎこそ大きいが、其原因を穿鑿すれば矢張り此道理を主張しやうといふ人々の精神の爆發に外ならない。弟の不法なる侵害は常に正當と認められ、兄の道理ある訴訟は却つて不道理として擯斥される。茲に於て兄は道理を主張する爲め止むを得ず暴力を用ひる事となり、遂に一種の小革命は此家庭に起つた。無論兄は腕力を以て弟を屈

及教育者の慎むべき所なり

從せしめたのである。

爾來兄弟の仲は益〻乖離するばかりであつた。けに革命の源は虐王の暴政である。公平なるべき父母は、今や虐王となつて此家庭に君臨し、遂に革命の旗擧げをさせたのである。

第十六　無情なる人物を養成する方法

其一

秘訣　兒童の目前にて他人を惡しざまに批評せよ

小人閑居して不善をなすと云ふが、是は恐らくは萬世を貫いて變らない眞理であらう。東京の或る町に物好な何某といふ人があつたが、一定の職業もなく、唯安閑と其日を送つて居た。然し此人にも、特別の面も珍無類の業務がある。其は往來通行の人に對して、種々の批評を下す事である。而して批評の內容は、徹頭徹尾惡口を以て充たされて居るのである。

あゝ向ふから隣家の娘が來た。あんな女を嫁に貰つた人こそ災難だ。どうだあの扮裝は……彼處から來る奴は保險會社の小役人だ。大手を振つて己れ位豪い者はないと云ふ顏付をして居る……あれは醫者の誰某だが、碌に病家も無い癖に、無闇に服裝ばかり立派にして大家ぶつて居る。其癖魚屋の拂ひも出來ないと云ふ話だ……其處に行くのは誰だ、あんな洋服はよせば宜いのに、全然身體に適つて居ない。多分古着屋で買つて來たのだらう……あの子供の親は不行屆だと見える、可哀想に何時も襤褸ばかり着て居る……あの奧樣は車に乘つて豪そうに見えるが、元を洗へば車屋の娘だそうだ。今ではあんなに威張つて居るが、昔は三度の飯も碌に食へなかつたのだ……おい、皆早く來て見

ろ、彼處から來るのは此間喧嘩をして警察の厄介になつた奴だ、どうも人相が善くない……

彼の批評は大略斯の如く惡口雜言の塊である。而して彼は妻子の面前に於て之れを口にするを以て大得意として居る。

妻は之れを聞いて、世間の人の多くは痴呆にあらずんば不道德家なりと信じ、子供等は之れを聞いて、自分の親ほど世の中に賢い人はないと信ずるに至つた。それ故子供等は、世の人間を眼下に見下し、他人の不幸に對して一切同情を表さないのみならず、不幸なるものは寧ろ愚者惡人の當然受くべき罰だと心得る樣になつた。

其二

秘訣　同情の發作を窒塞せよ

朝から降り出した雪は、まだ止みそうの氣色もない。少し赤味を帶びた灰色の空からは、限りもなく紛々たる鵞毛を飛ばしつゝある。

此景色を門前で眺めつゝあつた春代は、突然駈け込んで來て、

阿母さん、お金を頂戴な。

母親は不審そうに、

何にするの？

と問うた。春代は直ちに門前を指し、

今、門の處に老人が居て、此寒いのに朝から何も喰べないつて震へて居ます、ですからお金をやらうと思ふのです。

之れが春代の小さい胸から溢れ出た涙の一滴である。然るに殘酷なる母親は、此愛すべき慈悲の芽生を育成せんとはせずに、宛も地獄に於ける惡魔の如く、

そんな者に構つてはいけません。そんな人は若い時分に心掛が善くなかつたので罰が當つたのです。そんな者には一文でもやつてはなりません。

然し春代は更に涙を以て願ふに、

それでも可哀想で堪りませんから、一錢でも二錢でも萬望施してやつて下さい。

母決してなりません。子供の癖に施しなんて、以ての外です。乞食をする樣な人は自業自得なのです。乞食をする位なら働けば宜いのです。施しなどをする樣ではお金は貯蓄りません。

嗚呼、春代の萌え出でんとせる同情の芽生は蹂躙された。人類の最も貴重なる慈悲の涙は、今此春代を假りて憐れなる老人の慰藉の源泉たらんとするとき、一陣の猛風來つて涙の湧き出づる泉に土砂を投じたのであつた。何故に乞食を以て自業自得なりとして罵るのであるか。同情の涙は其人の過去の罪惡を問ふべきものであるまい。神は人間の罪惡を罰する權力がある。然し己れ自ら罪人たる人間は、決して同じ人間の過去の罪惡を尤める權利がない。唯涙を以て人の苦痛を洗ひ、同時に自己の罪惡を償ふべき義務があるのである。自己の涙は實に自己の苦痛を洗ひ去るべき唯一の清き泉なのである。嗚呼殘酷なる母、彼は此清き春代の涙を乾かさんと努めたのである。否、春代の清き心を地獄の火を以て燒かんとしたのである。

人は不幸に陷り易いものである。元より懶惰によつて不幸に沈む人もあらう。然し總ての不幸なる人が皆さうであるとは斷言は出來ない。弱きは人間の性であるとすれば、隨分憐むべき事情によつて不幸に泣く人もあるであらう。父母は宜しく斯かる機會を捉へて、兒童に教訓し、同時に其慈悲心を燃え揚がらしむべき

責任がある。然るに春代の母は全く之れに反對の主義を取つたのである。

母の教育が斯の如く矛盾して居るので、可憐なる春代は遂に無情冷淡なる人となつた。彼は下男下女が賤しい勤めを爲すを見て、是れ亦因果應報の爲す所とし、之れを酷遇して少しも怪まなかつた。

嗚呼春代、彼が社會から殘忍無情の鬼女と罵られた時、記者は寧ろ春代に向つて滿腔の同情を表せずには居られなかつたのである。

第十七　我儘なる人物を養成する方法

秘訣　兒童の要求を悉く滿足せしめよ

某は妻を迎へてから十年、一人の子供もなく寂しい生活を爲しつゝ、常に他所の家庭の賑かなるを羨んで居た。然るに幸にも十三年目といふに一子が生れた。

ルソー曰く兒童には何事も制限もなく存在することを忘れべからず、かゝる愉快堪へざる遊戯を中途にして止めるなら不平漏らさず

而も玉のやうな可愛らしい男の子。

さあ夫婦の喜悅は譬へ樣もない。此掌上の玉の爲めには、自分等の生命も惜むに足らない。況んや財產をや、勞力をやである。されば何事も子供の意思に背くまい、何事があつても子供を怒らせたり泣かせたりしまいとした結果、遂に恐るべき氣儘自儘の性行を涵養するに至つた。護謨毬、風船、人形凡そ太郎の欲する所は、如何に精巧なる玩具でも價を吝まずに調へてやる。而して太郎の氣に入らぬ事があれば、父母は唯翼々として其歡心を買はんことに努め、其機嫌をとるに忙しい。其が爲めに下婢數人を取換へ引替へ傭入れる始末であつた。

太郎は追々成長して、獨歩きの出來る樣になつた。彼は思ふ處、欲する處に駈け廻つて、母や下婢などの止めるのを聞かばこそ、庭園といはず、座敷といはず、楷子段、緣側、たゞ行きあたり次第に歩き廻る。或時太郎は强ひて倉庫の中に

他の課業に就くを得るは丈け自制の心あらしめざるべからずと

入らうとて大聲を擧げて泣き喚いた。下婢は種々に太郎を賺して、「お庫の中は暗いから御止し遊ばせ、今御庭へ連れていつて上げます」とか、「あれ、奇麗な鳥が來ましたよ。あゝ、なんと美しい花ではありませんか、御覽遊ばせ」などと騙したが、氣儘な太郎は益々哮り狂うて、少しも應じない。太郎の母は何事が起こつたのかと、急ぎ駈け來つて此體を見、先づ下婢を叱り付け、其譯を尋ねた。下婢は太郎の要求を話して、庫の中は暗い故御止め申したのであると答へた。母は恐い眼付きで下婢を睨め付け、太郎の頭を撫でながら、

今直きに連れて行つて上げるから泣かずにお居で。

と云ひながら、且つ賺し且つ慰め、蠟燭へ火を點して倉庫に這入つた。然し暗澹として陰鬱な倉庫の中のこと、二三歩這入ると太郎は最早逡巡して頭を振る。母は唯々諾々として太郎の手を執りながら外に出た。

太郎の一言一句は宛も君主の命令の如く、之れに反抗するものは一人もない。泣く兒と地頭には勝たれぬと云ふ諺は、遺憾なく此家庭に實現されたのである。上は兩親より、下は下女下男に至るまで、諾々として唯命是れ從ふ有樣である。

太郎　こんな物は嫌ひだ！

親　お前は何が食べたいの？

太郎　御菓子をお呉れ。

菓子は請求通り直ちに太郎に與へられた。

太郎　之れは旨くないから果物をお呉れ。

親　果物は生憎ないよ。明日屹度買つて上げるから、それまで待つておいで。

太郎は中々承知しない。一聲高く泣き出した。其結果下婢は主人の吩付けによつて果物屋へと走り行くのである。

我儘は多く教育の過ぎよりして、其生ずる原因は過度に兒童の言ふ所に從ひ、又聽從は其所得を誤ざるにあり

太郎は喉が乾くと云ひ出した。母は例の如く猫撫聲で、砂糖水にしやうか、牛乳にしやうかと尋ねる。太郎は頭を振つて、珈琲がいゝといふ。火は赫々と起されて湯が沸かされる。斯くして珈琲の出來上つた時、太郎の慾望は俄かに方向を轉換して、牛乳の方がいゝと云ふ。母は已むを得ず珈琲を止めて牛乳を與へる。太郎は牛乳のコップが自分のでないから牛乳を飲まぬと云ふ。母は自慢顏に、太郎は年も行かないのに、もう自他の區別を知つて居る、悧巧な子だと賞揚する。斯の如く太郎の意思は何事によらず貫徹されるのであつた。

太郎は成長するに從ひ、益々我意が募り、一人前の男子になつた時は、近所では彼を我儘太郎と綽名する樣になり、誰も眞面目に彼と交際する者がない。然し我儘太郎は依然として我儘太郎であつた。彼は轉宅をする事一年間實に七八回、然しどの家も彼の氣に入らない。彼は妻に對しても我儘勝手の擧動をなし、朝夕小言の絶える間がない。妻は其が爲に遂に病に罹つて死去した。次に迎へた妻も、夫の我儘に堪へ兼ね、實家へ歸つたまゝ再び戻つて來ない。召使のものも一年に少なくも二三人は替る。而も太郎の氣に入る者は一人もないのである。太郎の眼には恐らくは世界の何事も氣に入らないのであらう。出來得べくんば天地も改造して貰ひたいと彼は考へて居る位であらう。滿足を知らない彼は、日々怏々として樂まず、遂に憂鬱症に陷り、次第に衰弱して存命最早覺束ないとの事である。

第十八　虛言者を養成する方法

其一

秘訣　早くより虛言を敎へよ

某は日々其子に虛言を敎へて怪まなかつた。例へば客の訪問するものあれば、

父母及教師たるものは自己に對して嚴格なるべらざるべからず、而して少なくとも兒童の面前に於て此關係に於ける弱點を露出すべからず

其子に吩咐けて不在だと云はしめ、器物を借りに來るものあれば、氣の毒だが他へ貸し與へたと云はしめた。

此父にして此子あるは寧ろ理の當然とも云ふべきであらう。で、日に益々猾智に長じ、或は口實を設けて學校を缺席し、或は學校へ行くと稱して公園に日を暮す事なども數回に及んだ。而して教員より質問を受くる時は、父の用向きの爲め止むを得ず缺席したとか、腹痛の爲め途中より歸宅したとか、巧に虛言を弄して恬然恥づる所がないのである。

彼は又種々口實を設けて、母親に小遣錢を請求する事がある。而して母親の容易に之れを承諾せぬ時は、父親に就て請求する。父親は密かに其請を容れ、若干の小遣錢を與へ、且つ戒めて云ふ樣、「此事は母に告げてはならぬ、若し母の尋問に遇つたら、叔父から小遣錢を貰つたと答へよ」と。彼は乃ち父の命に從ひ母を欺くのである。

父の教育法は斯の如くである、虛言を弄する術に於て其子が長足の進歩をなすは毫も疑ひを容るゝに及ばない。彼は長ずるに從つて不良の徒輩と交遊し、學業を廢して連日諸方を遊び歩き、知己朋友に就て金錢を强請し、遂には父の金錢を窃取し、又窃かに家財を賣り飛ばす等、將來實に恐るべき天晴なる不良少年となりすました。流石の父も驚かざるを得ない。

親　近頃家の中で色々紛失物がある、之れは家内に盗人が居るに違ひない。

彼は之れを聞いて悸としたが、つと立つて父の耳に囁く樣、

子　阿父さん、其盗人は誰だと思召します、實は私は其事に付いて思ひ當る事があるのです。

自ら虛言を教へて、其教へた虛言に騙さるゝと知らぬ父親は、

親　思ひ當る事とは何だ。

子　外でもないんです、家の車夫です。あれは大層金を遣ふので、近所中で評判です。此前の日曜日に一圓紛失したでせう、丁度あの晩に、彼は博奕を打つて、一圓負けたと云つて居ました。其他にも彼は怪しい擧動が種々あります。父は見る間に烈火の如く赫怒し、車夫を呼んで怒鳴り付けた。事茲に至つては車夫と雖も怒らざるを得ない。名譽恢復の訴訟を提起して、堂々と理非を法庭に爭はんとした。父も大に悟る所やありけん、泥棒を捉へて見れば我子なりの一句が現實されん事を恐れ、遂に莫大の金を投じて示談を遂げる事になつた。是より二三年の後、某は其子の爲め莫大の負債を引き受け、遂に落魄して憐むべき境遇に陷つた。某は嘆息して、

我が子は何處で虛言を吐く事を覺えたのであらう。

と。豈圖らんや虛言を敎へたのは夫子自身に外ならぬのである。

其二

秘訣　虛言を稱揚せよ

來客が二三人あつて、家族と食卓を共にし、種々雜談を交へつゝある時、お清は母親に、

清　阿母さん、私にもお酒を一杯頂戴な。

母　いゝえ、お酒は子供の飲むものではありません、お前は御飯をお上りなさい。

と云ふと、お清は直ちに母親に一矢を酬いた。

清　だつて阿母さん、阿母さんは先達、胃の惡い時には少許りお酒を飲む方がいいとお仰つたではありませんか。阿母さん、私はお腹が痛いのですよ。

一座の人々は、お清の頓智を讃へ、哄笑を以て之れを迎へた。子に甘き母親は

心窃かに悅んだのである。よつて直ちにお淸の請を容れ、一杯の酒を與へた。お淸の虛言は圖らずも其主張を貫徹せしむる事が出來たのである。母はお淸の飲み了るを待つて、

母　お淸や、お腹が痛いのは癒つたの

淸　えゝ、癒りました。

一座再び哄笑の聲に充たされた。お淸の得意思ふべしである。

是より以後、お淸は機會ある毎に直ちにかゝる串戲交りの虛言を弄して、他の稱讃を博すると同時に、己れの慾望をも充たすを常とした。此事遂には習慣となり、頗る虛言を巧にするに至つた。斯くて二三年の後、學校で虛言家お淸の名は、遍く朋輩の間に鳴り響いたのである。

其三

兒童の智能は縱令的に可なりみ笑つてもなる巧にて向つてを喝采へ又は與へ同情をす表示す如き動作を言ふべからず

秘訣　兒童の告ぐる所を悉く信用せよ

去る金滿家の細君、交際家の事とて、兎角家に居る事が少ない。然し家に歸れば必ず子供を呼んで、其行狀等を問ひ糺すを常とした。そうして子供の云ふ事に虛言はないと確信して居た。子供等は一齊に、母親の外出中勉强して居たとか、兄弟睦しくして居たとか、各自都合のよい事のみを告げて、其不利なる事は押隱して居た。

遊歩に行く時なども、子供等は常に母親の滿足する場所を指定し、實際は他所へ赴くのである。然し母親は飽くまでも子供等の言を信じて疑はない。若し人あつて其不注意を忠告すると、母親は、子供に虛言はないの一言で之れを斥けるのである。

元より兒童は無邪氣のものに相違ない。然し追々成長するに從つて、大に注意

虛言を自己の利益のために弄するは、一種の變態騙取事を敢てする虛言を爲すに至る

を要するは勿論の事である。或日の事、母親は例の通り不在である、子供等は兼て母の禁じて置いた場所に於て、近鄰の惡童等と遊戯した。此事母の聞く所となれば必定叱責せらるべきを思ひ、子供等は相談の上、母に之れを匿す事とした。

偖て母親は歸宅した後、例によつて子供等に留守中の出來事を問うた。子供等は、阿母さん、私達は門前で遊んで居ましたと答へた。母は之れを聞いて、門前なら關はないと、例の如く土産を與へた。

子供等は追々增長して、遂には兒童等の立ち寄るべからざる惡所へ赴き、母親が歸ると澄し込んで、家で勉强して居たと云ふ。斯くして彼等は年一年虛言を弄する事に長じ、遂には母親のみならず、他人をも瞞着するに至つた。子に甘い母は常に斯の如きものである。

其四

虛僞を兒童に臨む嚴峻過ぎるは不可、罰を嚴なるに過ぎるは畏るべし

秘訣　兒童が事實を告白する時之れを處罰せよ

正雄は或日蠅征伐を始めたが、一匹の敏捷こい蠅を叩かうとして、過つて父の秘藏の花瓶を微塵に壞した。正雄は恐慌措く處を知らない。然し子供心に思ふやう、直ぐ阿父さんの所へ行つて、正直に自分の過失を告げて詫びるに如かずと。早速父の許へ行つて、

正　阿父さん、私が今蠅を叩かうと思つて、過つて花瓶を壞しました。萬望勘辨して下さい。

父　なに、大切な花瓶を壞したと。

正　はい、決して故意と壞したのではありませんから、御免下さい。

父　馬鹿！勘辨はならない。

正　どうぞ御免下さい。

父ならぬ！

父は立ち上つた。而して緣側にある手ごろの棒を執つて、泣き叫ぶ無邪氣の正雄を續けざまに打つた。

正　御免なさい……ど、どうぞ……

父　貴樣の樣な奴は、思ひさま懲らして置かないといけぬ。

正　痛い……もう致しませんから……どうぞ……

父　能く覺えて居ろ、今度此樣な事をすると承知をしないぞ。

斯くて正雄は辛うじて殘酷な父の手を免れたのであつた。

或日正雄は机の上で父の寫眞帖を繰擴げて居たが、如何なる機會にか、寫眞帖はずる〳〵と滑り墜ち、正雄が呀と叫んで之れを押へやうとする時、圖らずも臺紙一枚を引き裂いた。正雄は前日の苛責を思ひ出して、戰慄する事數刻、今回は何處までも之れを隱蔽せんと試み、そつと寫眞帖の表紙をふせて之れを元あつた場所へ載せて置いた。然し隱れたるより顯はるゝはなし、父は直に寫眞帖の破損せるを發見し、直ちに正雄を呼んだ。

父　正雄！寫眞帖を破つたのはお前だらう。

正雄は飽くまでも事實を隱蔽しやうと思つたが、彼の良心は之を許さない。よつて彼は恐れ戰き、聲も震ひつゝ事實を陳述し、其決して故意に爲したるにあらざる旨を告げ、且つ前日の如く打擲せざらんことを嘆願した。頑固なる父は、爭で正雄の辯疏と嘆願とを聽くべき、今度は正雄を縛して、前回よりも一層激しく打擲した。

讀者よ、正雄が年を重ぬるに從ひ、如何なる方面に向つて發達したか、玆に云はずして明かであらう。正雄は事實を陳述するの愚なるを悟り、如何に粗忽の事

を爲すも、沈默の間に之れを隱蔽し、或は罪を他に嫁して、自己の苦痛を免れんと試みた。

彼は硝子窓を破壞して、之れを風の罪に歸し、茶椀を毀損して、之を飼猫の惡戯なりとし、決して父に事實を告げなかつた。否、父へのみならず他の人に對しても、自己の非を蔽ひ隱して平然たるに至つた。

或日の如き、正雄は肉汁の皿を轉倒して其衣服を汚した。彼は之を母に告白すべきに、父を恐怖するの餘り、そつと其衣服を隱蔽し、翌日に至つて父の面前に之れを持參して、

阿父さん、誰かゞ私の大切の衣服を此通り汚しました。

と眞面目なる面持して陳述した。

茲に至つて正雄は隱然詐欺師の萌芽を生じつゝあるのである。虛言を事とする兒童惡しきか、之れを指導する父母惡しきか、其は唯讀者の判斷に任すが、事實を陳述すれば打擲され、虛言を弄すれば無難で濟むといふは、果して正當なる教育と云ひ得るであらうか。

其五

秘訣　兒童に虛言を弄する機會を與へよ

蒲團の中からむつくりと起きるや否や、お千代は勢よく母親の許へ駈けて來た。然し今迄蒲團の中に潛つて居た爲めか、頰のあたりが、眞赤になつて居る。

母は之れを見て驚いた。

母　お千代、大層顏が赤いね、どうかおしなの？……一寸脈をお見せ……

おや大層脈が早い……お前は氣分が惡くはないの

お千代は得たりと母の言葉に乘じ、

千代　今朝少し氣分が惡いの。

母　頭痛はしないの？

千代　えゝ、少しします……額の上が……

母　お腹は？

千代　少しちく〳〵するの。

母　本統に困つたね。

と、母は急ぎ父親の許へ行つて、

貴方、お千代は病氣ですよ、脉も早いし、熱もあるし、頭痛もするし、お腹も痛むのですつて。

父　其は困つたな。

母　困つたなどころぢやありませんよ、今日は學校を休ませて養生させますから。

斯くして偶然の出來事よりお千代は一つの教訓を得た、而も最も都合のよい教訓である。即ち虛言を吐いて學校を休み家で遊んで居られるといふ事である。

之れより後お千代は頗る狡猾に立ち廻つて、母親が寒いか、暑いか、腹が痛むかなどゝ聞くときは、其無邪氣なる面に皺を寄せ、苦痛の狀を裝うて母を瞞着した。子に甘き母は何時も吃驚いて學校を休ませ、遂には病身であるとて學事を全廢し、保養三昧に可惜歲月を經過せしむるに至つた。

聞く處によれば、お千代は母の所謂養生法に從ひ、美食に飽き、遊樂に耽り、而して實際の衞生、身體の運動等を怠つた爲め、大に其健康を害し、自然と虛弱に陷り、遂に一生の幸福を犧牲にするに至つたさうである。

其六

太郎と次郎とは學校朋輩で親しく往來して居たが、次郎の母は頗る饒舌の婦人

で、太郎の訪ひ來る毎に種々厭煩い質問をする。

次母　太郎さん、今日お前の阿母さんは何をして居なさるの

太　知りませんよ。

次母　知らない筈はない、針仕事でせう。

太　知りませんよ。

次母　それでは新聞でも讀んで居なさるの

太郎は面倒に思ひ、

太　あゝ針仕事です。

次母　そら御覽なさい、針仕事でせう……阿母さんはどんな着物を着て居るの？

太　どんなんだか、知りませんよ。

次母　知らない事はない、木綿の着物ですか、絹の着物ですか

太郎は面倒に堪へない、口から出任せに、

太　絹ですよ。

次母　縞なのですか、無地なのですか？

太　無地なのですよ。

次母　阿母さんは臺所で何を拵へて居るの。晩の副食物は何？

太　牛肉の香ひがしたつけ。

次母　晩に御客でもあるの

太　そんなことは知りませんよ。

次母　臺所で御馳走が出來れば、お客があるか、ないか位な事は分りそうなものです。

太　乞度叔父さんでも來るのでせう。

太　あゝそう〳〵、叔父さんが來るつて、阿母さんが云つて居ましたよ。

次郎の母は太郎の答を得て滿足の樣子であつたが、太郎の答は一つも眞實ではないのである。唯五月蠅く迫られる爲め、已むを得ず虛言を弄したのである。此の種の問答は太郎が次郎の家を訪問する毎に行はれる爲め、太郎は遂に斯道に於て長足の進歩を爲し、先方の問を俟たずして自ら進んで出放題を饒舌る樣になつた。

斯くて太郎の將來は如何に成り行くであらうか。讀者は大方著者よりも能く知つて居らるゝ事であらう。

第十九　痴愚者を養成する方法

其一

秘訣　兒童に過ちある時は痛く之れを打擲せよ

痴愚觀念の成立及結合の餘りに遲緩なるか

若し觀念の用ひられる程度に於て或作妨害せらるゝ因、起觀念成立及結合遲緩なる事原因結果會速領會事能鈍之、と云痴愚觀念の

或る軍人の家では、子供に過失があると、直ちに之れを打懲らすのが例であつた。太郎でも、次郎でも、少しく兩親の氣色に觸るゝ時は、

待つて居ろ、今拳骨をやるから。

と、云ふより早く目から火の出さうな鐵拳が飛んでくる。殊に父親は平常擊劍で固めた腕で、力任せに毆打すのであるから、子供等は實際目が眩む程である。

斯かる懲罰法は頗る効力がある。長ずるに隨つて子供の瘤だらけの頭腦は益々鈍くなり、眼睛は惘然として腐敗せる魚の目の樣になり、口元は締りがなく、宛も彈機の外れた蟇口の樣であつた。固より判斷力も思考力もある筈がなく、「兄弟馬鹿」と云ふ近所評判の名物男となるに至つた。

馬鹿者を製造するには此方法を實行するに限る。拳骨の功能は、中々賣藥等の及ぶ所でない。

成立及ぼす結合害せいの阻害せいらるる時はく了事全物解事ずるはを能愚云ふ之味とを

其二

秘訣　思ふ儘に暴飲せよ

去る製造所の技師に兄弟二人の子供があるが、揃ひも揃つて評判の馬鹿者である。兄は八歳になつて漸く口が利け、弟は十二歳になつて辛うじてイロハのイの字を覺えた位である。兄弟ともに小學校に通學する事早や四五年になるが、一回も及第した例がなく、先生から度々注意を受けた揚句見込がないとて遂に諭旨退校といふ事になつた。

母は大に心配して、醫者に相談して見たが、流石の國手も馬鹿に付ける藥なしとやらで、斯く答へた。

いやどうも仕方がありませんな。貴方の御亭主は、暇があれば飲んでばかり居て、酒の薫がしないで臥床に這入つた事はないと云ふ話ではありませんか。それでは幾人子供があつても皆駄目ですよ。

此馬鹿製造法も隨分有効である。若し母親までも一所に暴飲を勵行したならば、更に有効であるまいかと思はれる。

其三

秘訣　老成早熟の方法を講ずべし

大學教授某博士に、文子といふ一人の令孃があつた。彼の眼は黑味勝ちで大きく、口元はきり〳〵と締つて、如何にも怜悧な容貌を具備へて居る。博士夫婦は之れを愛する事、掌上の玉の如く、終日二人で其教育に從事したが、効驗は立ろに顯はれ、文子が二歳の時には既に嶄然として他家の子弟よりも頭角を露はして來た。兩親の喜悅と得意とは譬ふるに物がない。文子は將來天晴名高い人物になるであらう、決して教育を怠つてはならぬと、夫婦は畢生の力を盡して、益〻其智

識の扶掖と開發とに努めた。文子の進歩は實に著しく、世間でも其智慧の尋常ならざるに驚いて、是れこそ所謂神童であらうと云ふ評判を立てる位であつた。兩親は此機失ふべからずと爲し、文子が一事一物を理解する毎に、菓子を與へ、頭を撫で、種々の奬勵法を設けて智識を注入した。

斯かる教育法の爲め、文子は非常に腦髓を刺激され、他の子供等が遊び戯るゝ時も、彼のみは獨り一室に閉籠つて勉强に耽つて居た。文子は四歳の時に讀書が出來、五歳の時英語を繰り、六歳にして歴史を諳んじ、十歳にして論文を草した。若し文子が此勢で進んだならば、將來如何なる大學者になるであらうか、白石でも、カントでも、山陽でも、迚も及ぶ事は出來まい。

然し文子の光明時代は忽ちにして過ぎ去つた。彼が神童として迎へられた時代は其の十一二歳の頃より早くも夢となつたのである。文子が十三歳になつた時は、

早熟の教育は弊害失敗の因生ずる所の孤寂地位と置かれたる獨り教育者或は

其腦髓は最早六七十歳の老人の如くに枯渇して仕舞つた。之れより後は何事を教ふるも少しも其記憶に留まらない。十四五歳頃には彼の智識他の同年の子女に劣る事數等であつた。世間では文子を見て、或は白痴ではあるまいかと評判する位であつた。兩親の悲みは實に非常である。

文子が十六歳の時であつたが、田舍から博士の親族の者が訪ねて來た。此人は牧畜を業として居て、別段深い學問はないが、常識には乏しくない。彼は全然博士と其育兒法を異にし、子供等が六七歳に至るまでは、之に智識を注入しなかつた。而して子供等が八歳になつた頃、漸く之を學校に遣した。博士は事の序に涙を溢して文子の現狀を此人に物語つた。彼は驚いて、

文子さんは御病氣なのですか

いや〳〵、病氣ではありませんが、此二三年來俄かに記憶力が減耗して、今日

は教事過よるとる母師も兒面てのをしを者てよ人想かるるにな
之ふ度ぐりなす及たの童前世利談幼を早り的りを人志懷む至大可
なるに起常父教るのにのはる事害話年しくし成志懷む至大可
り不はにに

では極めて簡單な事柄でも容易に理解する事が出來なくなりました。私も文子の教育には隨分苦心したのですが、總ての骨折が全く無益になつたかと思ふと、涙が溢れる位です。

親族の牧畜者は之れを聞いて徐ろに云ふ樣、

私の考へでは、子供の教育法も矢張り自分どもの取扱つて居る馬と同じ事だと思ひます。餘り早くから車を牽かせると、其馬は其切り育ちません。子供も餘り早くから仕込んで、能力以上の智識を詰め込まうとすると、遂に老成早熟といふ調子の變つた發達をして、一生不幸に陷る樣な事にならうと思はれます。

私は兼てより貴方の教育法を見て、或は今日の結果を生ずるに至るまいかと心配して居たのです。貴方は學者ですから宛然釋迦に說法する樣なものと思つて、今日までは差控へて居ましたが、御考は如何なものでせう？

第二十　盜食の惡習を養成する方法

其一

秘訣　飽くまでも口腹の慾を充さしめよ

花子　阿母さん御菓子を頂戴な。

花子の家では丁度御菓子折の到來ものがあつたのである。

母　花子や、一寸お待ち、今御菓子器へ取り分けて上げるから。

花子は承知しない、泣聲で、

早く〈……阿母さん直ぐに頂戴！

母親は已むを得ず、菓子折から手摑みで菓子を取り出し、花子に與へた。

晝飯の時、花子は皿を母親の目の前に突き付けて、

早くお菜を取つて頂戴。

花子の父親は斯かる有様を見る毎に、子供の云ふ通りになつて、一々讓歩て居てはいけない。子供の慾心は成るべく之れを制止する様にしなさい。

然し母親は常に次の如き理由を以て之れに答へた。

貴方は何時でもその様な事を仰しやりますが、花子はまだ頑是ない子供ですよ。年さへ取れば、自然に分る様になりまさあね。

斯くして夫の言は少しも用ひられなかつたのである。

來客があつて茶菓子が出ると、花子は例によつて出て來て、じろ〳〵と菓子を眺める。母親は據處なく一つ取つて與へる。花子はそれを食し終ると、直ぐ母の袂を引いて、今一つ與へよと迫る。餘りの事に母親は知つて知らぬ様子をする。花子は大きな聲で、

御菓子が欲しい！

と叫ぶ。母親は客の手前もあるもの故、已むを得ず一つ取つて與へる。而も花子は尙飽き足らないのである。

花子は妙齡の令孃となつたが、母親の豫想は美事外れて、花子の貪食は益〻其度を高め、遂には盗食を敢てする様になつた。母親は已むを得ず戸棚に錠を下した。然し花子は之を開ける方法を工夫した。或時親類から美事なる一折の料理が到來した。之を瞥見した花子の食慾は猛然として起り、最早制止する事が出來ない。よつて彼は母親の油斷を見濟まし、窃かに戸棚を開けて、悉皆料理を食し了つた。花子は然る後飼猫の玉を戸棚の中へ放ち、知らぬ面持して居た。母親は料理を盗食したのは全く猫であると思ひ、痛く之を毆打いた。猫こそ飛んだ災難に遇つた

のである。

花子は度々斯かる計略を行つたが、遂に母の知る所となつた。母は或時花子を呼んで意見をする様、

自分は幼少の比、親類の家で、一籠の葡萄を見て、知らず識らず一粒二粒と盗食しながら、とう〳〵其大半を食べ了つた事がある。後に至つてそれを家の人に知られて、大に赤面したが、お前にも萬一さう云ふ事があつては一生の瑕瑾になる。お前も最早子供ではないから、其邊の心掛がなくてはならない。

と。花子は之れを聞いて心窃かに喜んだ。自分も今迄は盗食の賤むべきを知り、自ら耻かしく思つたが、母親も自分と同樣、幼少の比、此罪を犯したと聞く以上は、最早少しも耻づるには及ばないと。斯くて花子は一生の間、遂に此野鄙なる習慣を脱する事が出來なかつたと云ふ。

美食は人を愚にし精神なのである正純な動作を妨ぐ

其二

秘訣　兒童が求むる儘に小遣錢を與へよ、而して其用途を問ふ事勿れ

紳商某嘗て或教育家の説を聞き、俄かに兒童の勤儉心を養ふ必要を感じ、毎週一回若干の小遣錢を與へて之れを奬勵した。然し其用途は之れを子供の任意とし、毫も干渉を加へない。某は斯くして思ふ樣、是れ意志の自由を尊ぶ所以で、獨立自治の精神を養ふ手段であると。

子供等が果物屋の店前を通行すると、葡萄林檎などが如何にも甘さうに並んで居る。菓子屋の店前を通行すると、珍らしい菓子が山の如く並んで居る。子供等は今日は林檎、明日は菓子と、毎日之を買ひ求めて、口腹の欲を滿たして居た。然し父は少しも之れを咎めない。子供等は漸〳〵增長して、其買取るものも次第に贅澤になつて來た。從つて父から貰ひ受ける小遣錢は忽ちに消費され、勢ひ他に

貪食の最も惡しき方面は詐僞窃盗に陷る

金を得る方法を講ぜざるを得ない樣になつた。よつて彼等は種々の口實を設け、或は友人に就き、或は親戚に就て、之を借り受けた。然し負債の增加すると共に、之れを償却する方法がなくなつたのである。

子供等は如何にして此失態を蔽ひ隱すべき、彼等は種々苦心の末、遂に父親の金錢出入の頻繁なるを機とし、少しづゝ之を竊出し、以て其貪食の欲を滿たすに至つた。

「法科大學生某は放蕩の名高く、隨つて負債も學生不相應に多かつた。彼は其償却の途に窮し、遂に其友人數名の書籍、衣類、時計などを賣却したが、惡事忽ち露顯して拘引された。輓近學生の腐敗嘆ずべし」とは、某新聞の三面に現はれた記事であるが、この學生こそ紳商某の長男のなれの果であつた。又某の細君は窃かに家財を賣却して、酒食に耽るので、夫婦喧嘩の末離緣となつたとの噂があつたが、之れは紳商某の長女であつた。紳商は自家獨得の教育法が、斯くも不結果に終つたのを見て、大に嘆息したが、之れは彼が教育なる字義を誤解して、猥りに自家新案の教育法を施行した結果ではあるまいか。生兵法は大疵の原である。俄分限の無教育者は、先づ以て自分の教育を始める方法がよからう。

神經衰弱の兒童は貪食者となり貪食者は神經衰弱となる

第二十一　大食家を養成する方法

秘訣　胃袋の張裂くる程飽食せしめよ

米相場が的中つた、生糸で儲けた、といふ勢で近來日の出の俄分限者某の細君以爲へらく、紳士豪商とも稱ばるゝ者の令夫人は、自ら手を下して子供を育てるものでないと。よつて一人の媼婆を雇ひ入れ、之れに先頃生れた愛三の養育一切を委任した。

媼婆は令夫人の命を奉じて愛三に傅き、能く其世話をした。然し此媼婆の考が面白い。彼の意見によれば、子供は口が利けない、饑餓に迫つても之を知らせる事が出來ない。それ故牛乳は出來る丈多量に飲まして置くに限ると。やがて此新案の育兒法は實地に應用され、愛三の口には朝から晩まで護謨の吸口が押し込められ、飲ませるわ、飲ませるわ、世間の子供に比べると、凡そ三四層倍の牛乳は、愛三の口の中に注ぎ込まれるのである。

愛三が稍長じて少しく口を利く樣になつて以來は、媼婆の主義は愈ゝ遺憾なく實行され、愛三の一言半句は總て皆飲食物の別名であるかの如く解釋せられた。斯くして愛三の日課は食ふと飲むとの二者に限らるゝ事となつたのである。

愛三は成長した後、鯨飲馬食する事の外、何一つ覺えた業がない　換言すれば、彼は飲食物を澤山腹に入れて、之れを消化し、之れを排泄する爲め、世に生れ出た肥料製造人に外ならないのである。然し唯一つ容易に他人の企及すべからざる秘術がある、其れは卽ち……酒を一回に五六升、飯を大茶椀に十二三杯、瞬間に喫し了つて、而も平然自若たることである。

醫家コノリー曰く、天性殘忍なる質を備ふるものは之を根治する事を最も困難なり

第二十二　殘酷なる人物を養成する方法

秘訣　動物を虐待して其苦痛の狀態を目擊せしめよ

赤堀剛三の人と爲りは、頗る殘忍刻薄を極めて居る。若し彼を王者の位に卽かしめたならば、差し當り桀紂と名を均うして、青史に罪惡の痕を留めるであらう。近隣では野蠻人なる尊號を奉つて彼の代名詞として居た。

此野蠻人は手當り次第動物を虐待する。犬を見れば之を樹に垂下げて竹槍で突き殺し、猫を見れば喉を絞めて窒息させ、馬に乘れば鐵の鞭で亂打して之れを疾

唯生後の殊育誤り忍性馴た駈させ、其の泡を吐いて困憊疲勞するのを見て、大に愉快を感ずると云ふ風であつた。然し其れが動物のみに限れば、幾分か恕すべきであるが、決して其のみではないのである。

彼の妻は一年三百六十五日、生疵の絶えた事がない。彼の召使は赤樫の木劍の下に瘤だらけとなつて追ひ使はれる。彼が其子供を譴責するときには、物をも云はずに之れを裸體にして、手と足とを荒繩で樹に縛り付け、然る後處嫌はずに之れを亂打する。若し子供が悲鳴すれば、彼は愉快氣に更に強く毆打するのである。

然し斯かる殘酷の行爲も、全く原因のないのではない。彼が幼少の比常に行つた遊戯が自ら彼を玆に導いたのであつた。例へば赤蛙の皮を剝いて熱湯の中を泳がせ、生きて居る蛇の口に火藥を入れ、火を放つて其身體を破裂させ、虫類を捉へて其手足を捩ぎ取る等、凡そ此種の殘行は、彼の好んで爲した所である。彼の事物に對する殘忍性は、彼の正直なる意志を發表せしめたものである。

事種々の教育法に致命的なる缺陷を有せしめたものである。

温和慈厚の仁寛大なる人間に誇つたのは、其飼養せる鷄を捉へ、全身の羽毛に火を付けて、跳ね廻らせる事であつた。鳥の巣を壞して雛を虐殺し、親鳥を捉へて其翼を折り、其嘴を破碎するなどは、彼に取つて頗る普通の事に屬するのである。

赤堀剛三の總ての行が斯う云ふ有樣であるから、無論其子供等も殘酷なる事を以て無上の快樂とする。長男は中學校に通ふ比、羅馬のネロ皇帝の殘虐なる歴史を讀み、手を拍いて快哉を叫んだそうだが、其は少しも怪しむに足らないのである。若し彼が之れを爲すの勢力と自由とを有したならば、彼は無論自らネロ皇帝となるのであらう。

凡そ殘酷なる兒童を養成するには、先づ赤堀剛三の門に入り、其教育法を學ぶこそ最も捷徑であらう。

第二十三　復讎心を養成する方法

其一

秘訣　兒童の不平を破裂せしむる樣努むべし

座敷の眞中に突立つて稲造は大聲に叫喚いて居る。其傍には母親が杖を振り上げて椅子を續けざまに亂打して居る。

之れは一子稲造が椅子に躓いて轉倒し、泣き出したのを見て、母親が慰めやうとして罪を椅子に歸し、之れを敲くのである。椅子は無論生物でないから痛みを感じないが、然し椅子に罪のないことは云ふまでもない。母親にして若し多少道理を辨へ居らば、寧ろ稲造に諭して爾後歩行する時に注意せしむべきである。然るに教育の何たるを知らない父母は、事茲に出でずして其子を邪路に入らしむるのである。

或時稲造は庭園に於て復々躓き倒れて、少しく怪我をした。父母は急ぎ庭に走り出で、飼犬を捉へて之れを亂打した。其は此犬の爲めに稲造が倒れたものと見做し、責を飼犬に負はせ、稲造を慰めたのである。

斯く椅子より飼犬に移つた稲造の不平鎭定法は、更に其婢僕に移つて行つた。稲造は自己の不平を漏さんが爲め、罪なき婢僕を打擲し、他人の自由と安寧とを犧牲に供し、以て自ら得たりとして居た。或時一人の下婢は稲造の爲に痛く面部を傷つけられ、憤怒の餘り稲造を打ち返した。父母は怒氣滿面に溢れて下婢を呵責し、爲めに彼は此家を辭し去る事となり、稲造の父は其損害に對して少からぬ賠償金を取られた。

斯の如き教育は終に稲造をして其父母までを毆打するに至らしめた。彼は傲岸

不遜なる言語を以て父母を凌辱し毫も意に介さない。若し父母が之れを叱責する時は、彼は復讎として手當り次第に家財道具等を破壞して自ら慰めた。

稻造が人と成つた後も、其復讎心は依然として旺盛であつた。之れが爲め彼は幾度も其地位と職業とを失ふに至り、遂には家を捨てゝ流浪する事となつたそうである。

其二

秘訣　怨恨を深く兒童の腦裡に印象せしめよ

武二は或日學校の體操場で、他の生徒等と石投げの遊戯をして居た。然るに不圖した機會で同輩なる竹雄の投げた石が、あはれ武二の眞額に命中し、鮮血淋漓として流れ出でた。皆の驚きは一通でない。中に竹雄は甲斐々々しく武二を介抱し、

君、決して故意と遣つたのではないから、勘辨してくれ給へ。そうして家に歸つても默つて居て呉れ給へ。

幸ひ武二の傷は輕かつた。そこで彼は家に歸つてからも之を父母に秘して居たが、夕食の際父は早速額の傷を發見し、

父　こら武二、又喧嘩をしたな。

武　いゝえ一寸轉んで怪我をしたのです。

父は恐ろしい目付で、

父　貴樣は親を欺かうと思ふのか、轉んでその樣な處に傷が付くか、能く考へて見ろ！

武　本統に轉んだのです。

父　虛言を云ふな。喧嘩をして負けて來たのだらう、隱してはならぬぞ。

父の詰問は激しい。そこで武二も已むを得ず事の眞相を物語つた。父の激怒は夥しい。

父　馬鹿！そんな事をされて默つて居る奴があるか。よし、己と一所に來い。

と、父は厭がる武二を促して、竹雄の家へと押し掛けたが、彼は憤懣の餘り、途すがら大聲をして竹雄の憎むべき次第を喚いた。元より物見高い都の事とて、何事が起つたのかと、彼等父子のあとに隨いて來るものが黑山の樣であつた。

武二の父は竹雄の家へ來るや否や、玄關前から怒濤の如き聲で我鳴りだした。やい、家の武二に怪我をさせた奴を出せ、早く出せ！

武二は傍に小くなつて居る。子供心にも竹雄に對して氣の毒で、心配に堪へないのである。

やがて竹雄の父は玄關に出て來て、武二の不慮の災難を慰藉し、且つ竹雄の過失を許容せん事を請うた。而も辭を卑うし禮を厚うして陳謝したのである。武二の父は中々承知しない。

かれこれ云ふには及ばない、早く武二に傷を負はせた本人を出せ、己が此處で成敗するから。

竹雄の父は此無作法なる言動に對して、唯呆れるばかりであつたが、武二の父は益々暴言を放つて猛り狂ふので、已むを得ず彼等を門外に追ひ出して扉を閉鎖した。武二の父は恨み骨髓に徹したと見え、目を瞋らして門を見返へりざま、

よし、覺えて居ろ、今に思ひ知らせてやるから。

斯くて夜叉の如き武二の父は竹雄の家を引き取つたが、其後竹雄が途中で彼に邂逅した時、無慘にも太い杖を以て打ち伏せられた。

武二の父は斯の如く無限の復讐心と敵愾心とに充たされて居る人物である。當

に今回のやうな事ばかりではない、萬一武二が學校で譴責される時は、躍起となつて校長や教師に喰つてかゝるのである。彼は斯かる勢である故、最早誰も取合ふものがない。武二も漸々父の感化を受けて、天晴の蠻勇家となり、睚眦の怨も必ず報いねば已まぬと云ふ樣になつた。彼は子供仲間で狂犬と云ふ綽名を取つた程である

武二の成人するや、喧嘩口論の爲め殆んど寧日なく、訴訟に續ぐに訴訟を以てし、之れが爲めに財産を蕩盡して仕舞ひ、終には已むを得ず復讎を腕力に訴へるといふ有樣になり、果ては牢獄に繫がるゝに至つたと云ふことである。

第二十四　嫉妬深き人物を養成する方法

秘訣　他人の幸福を見る時は之を自己の不幸なりと思惟せしめよ

ルバルトは曰く、兒童は往々猜忌嫉妬の性情を、あらゆる惡習、惡德は是れ一度び之が爲めに腐敗せしめられたものなり、其性根を改行的に

外觀の美を衒ふのは、恐らくは婦人の通有性であらう、又之れが婦人の優雅なる心を養ふ原動力ともなるのであらう。野に咲く薔薇の馥郁たる薫を賞して其儘行き過ぎるは男子の常であるが、立ち止まつて其一枝を手折り、己れの髢鬢を飾るべき自然の簪とせんとするは女子の特性であらう。其心根は如何にも優しい、如何にも愛らしい。然し若しも野の薔薇にして容易に折れない時は、心意燃え立つて無理にも之れを折らうと焦せる。其際若し刺の爲めに己れの手指を傷けられでもすると、俄かに薔薇を憎んで、之れを蹂躙るのも、亦婦人の特性であらう。此極端に走るの弊は宜しく矯正しなければなるまい。

こゝに記載する栗野家の夫人も亦此手指を傷めた婦人の類に漏れない。栗野家は別に今日の生活に差支へる程でもないが、さりとて餘裕のある身代でもない。從つて夫人の虛榮心も十分に滿足を得る譯に行かないのである。夫人も己れの家

善すること能はざる虞あり兒童の情意性品の陶冶上のとなり憂ふべきものなしとも

計を願みて、只管其狂ひ易き心の駒を抑へ付けやうとして苦心して居る。然し世の富める人々の美しく飾つて居る有樣を見ると、兎角此駒が暴れ出したがるには夫人も自ら困却して居る。夫人の姉は富める商人に嫁いで、華美な暮をして居るが、栗野の夫人は其贅澤なる體裁を見る毎に、嫉妬の念に堪へないのである。

夫人は骨肉に對してすら既に斯の如しである、若し赤の他人が榮耀榮華に驕るのを見聞すると、柳眉逆立ち、顏面朱を注いで、果ては悶絕するに至る事もある。嘗て隣家の婦人が莫大の遺產を相續したと云ふ話を聞き、

隣の女は藝も何もない、詰らない人間だのに、今度は數萬圓の遺產を相續したそうだ。之れから立派な扮裝をして威張り散らすことだらう。あゝ殘念！實に口惜しい事だ！

斯くて夫人は潛々と泣き出したのである。夫人は又知人の娘が某省の高等官と結婚したといふ事を聞き、突然悶絕するに至つた事もある。

斯かる話は夫人の生涯を通じて算へ盡されない。夫人に一人の令孃がある、母の煩悶を見るに忍びないで、屢々之を慰めるのであるが、其實令孃自身も亦悲哀の觀念を抑へる事が出來ないのである。「自家でも富んで居たら、母上も斯うまで煩悶なされないだらうに」と、是れ令孃が日に幾度も繰返す愚痴であつた。

此觀念は自然令孃をして嫉妬心を生ぜしめる源泉となり、遂に母子共に自ら燃ゆる心火の爲めに其肉體を傷ふに至り、家庭の平和は唯嫉妬より起る風波の爲めに押し流されて仕舞つた。母子共に他の美裝せる人など見ると、

今に火事が起つて、彼の所有物は一切燒け失せるだらう。さもなければ盜賊の爲めに奪ひ去られるであらう。

と、然し火事も起らず、賊も忍び入らない。母子の嫉妬は絕頂に達し、嗔恚の焰

は炎々として燃え上がり、二人とも遂に其焔に煽られて敢なくなつた。

第二十五　他人の損害を喜ぶ惡質を養成する方法

秘訣　他人の幸福を見る毎に不愉快を感ぜしめよ

他人の幸福を見て不愉快を感ずる人は、必ず又他人の不幸を見て悅ぶ人である、否、必ず他人の不幸に陷る事を希望する人である。

滿江の生涯は實に悲慘なるものである、否、外形に於ては幸福であるが、其心中には幸福を感ずる事がなく、絕えず他人の幸福なるを見て煩悶して居るのであつた。但し他人の不幸を聞く時は、彼は稍其心に愉快を感ずるのである。例へば或る婦人が寡婦となつた事を聞いた時、彼は手を拍いて喜悅し、又或る婦人が大病に罹つたのを見て、心窃かに滿足を感じたのである。

あの人は平素餘り高慢であるから、とう〳〵あんな風になつて仕舞つたのだ。一體ならもつと大きな不幸に陷る筈なのだ。

と。斯く他人の害を悅び、他人の不幸に陷る事をのみ祈つた滿江は、他人の不幸に陷るを悅ぶばかりでなく、飽くまでも其不幸を世間に吹聽する事に努めた。

嗚呼他人の不幸を悅ぶは最も下劣なる惡質であつて、人性に又あるべからざるものである。斯かる人は到底人間の中に立つて生活すべき資格がないものと言はざるを得ない。然し若し母たる人が滿江の如き振舞ある時は、其子たるものも亦同じく刻薄の人となるを免れないのは當然の事である。

＊　＊　＊　＊　＊

此惡質に關しては編者の著はせる兒童矯弊論（百十五頁以下）に左の一節がある。此惡質は殆んど人間的性情として見るを得ないものであつて、之を矯正する道も教育上之れ

なきものとしてある。此惡質は教育者の研究を要するものと思はるゝにより、爰に之れを抄出して讀者の參考に供するのである。

刻薄の兒童（甚だしく邪慳なる慘く辛き兒童）

刻薄は不正なる行爲に對して愉快を感じ、他人の受けたる損害を見て喜悅を覺ゆるものなり。若し同情を以て人間以上の美質なりとせば、刻薄は正に之を人間以下の惡性なりと稱するを得べし。刻薄なる者は弱點多き人間の常道を履まず、其辛酸を味はず、直ちに人間を深淵に擠し去るものにして、譬へば惡鬼の如し、人の弱點の爲めに苦悶するを見て欣々然たるなり。

刻薄にも亦種々の階段ありて、自の强弱厚薄の別あり。其の微弱なるものにありては、未だ全く人情を離れず、多少容赦すべき所なきにあらざるも、其の强烈なるものに至りては、全く人間的感覺の外にありて、人間瑕疵の最も劣等なるものたり。

對手の計畫の齟齬せるを喜ぶの心は、世上に敵味方なるもの〻存在する間は、必ずしも之を不正なる行爲と云ふべからず。然れども眞誠高潔なる喜悅とは、他人の行爲に對し妨害を加へず、他人の受けたる損害を追窮せず、却つて其の恢復を扶くるが如きを云ふものにして、此の種の道德は近世の國際戰爭に於て、數々其の例を見るなり。卽ち敵國の敗を歡喜し、自國の敵愾心を鼓舞するは、必ずしも不可なるにあらず、否、或程度までは然らざるを得ず。且つ國際道德の上より見るも、敵兵を再び用に堪へざるまで擊破することは敢て不可なしと雖も、此の程度を超えて、最早戰鬪に堪へざるに至れる者をも殲滅して快哉を唱ふるが如きは、既に刻薄の境に入れるものなり。されば國際戰爭に於ては、傷兵及び病院の如きは、啻に之を攻擊すべからざるのみならず、寧ろ之を保護するの義務を有するものなり。吾人の生活に於ても亦然り。敵手の困難苦痛を見て悅ぶ人あるも、何人も之を不德なりと云はざるべし。蓋し吾人は俗世界に在る結果として、他人よりも自己を眷顧するは勿論のことなれば、其の不快なりとし妨害者なりとし敵手なりとしたるものゝ、我が身邊を去るを喜ぶは人情の免れざる所、此の歡喜たるや畢竟自己の身に安寧を感ずるより生ずるに過ぎざるものなり。

自己の希望する所を他人が得る能はざりしを喜ぶは、是れ既に刻薄の稍や一歩を進め

たるものなり。例へば他人と位地若くは脊過を爭ひ、幸に勝を制したる場合には、其の我有に歸したるを喜ぶの餘り、他人の失敗に想到し之れを憐むの念を生ぜざるべし。此喜悅は卽ち同情の伴はざるものなるを以て、利己的性質を帶びたるものと云ふを得べし。又格別利害の關係なきも、唯だ自己の反對者として疾視し居るが爲めに、其者の失敗不幸を喜ぶが如きは、前者に比すれば其の刻薄利己心の度著しく深きを加へたるものにして、斯の如き憎惡心より來る刻薄は既に業に純然たる刻薄の部類に屬するものなり。然れども尙ほ多少の斟酌を加ふるを得べき分子を含有するものと見て可ならんか。何となれば對手が損害を受けたる爲め反省する所ありて、當初の敵意を飜すことあるべく、左なくとも對手が損害を受けたる爲め、其の勢力を失墜し、最早自己に危害を加ふることを能はざるべしとの觀念は、喜悅の一部分を形成するを以て、絕對に他の損害を悅ぶ刻薄の性情の外に尙ほ正當なる個人的感情の存するを認め得べければなり。

刻薄の尙ほ一層强烈なるものは嫉妬より生ずるもの是れなり。何となれば他人の幸福を猜忌するのものは、併せて亦其の不幸に陷るを喜ぶべければなり。元來嫉妬は他人の損害を喜ぶ心と自己に滿足を得んとする心とより成立するものなれば、業に既に單純の憎惡よりも深刻なる性質を有す。從つて嫉妬より來る刻薄は、憎惡より生ずる刻薄よりも一層嫌惡すべきものなりとす。且つ憎惡は高潔なる志操を有するものに存在することを稀ならずと雖も、嫉妬は常に多少の詐術を含むものにして、極めて下劣なるものなり。前者は場合に依りて對手を宥恕する宏量あるも、後者は徹頭徹尾之を認容するを許さず、而して此の二者は刻薄中吾人の最も多く見る所のものなり。

刻薄に最も深刻下劣なるものあり、之を純粹の刻薄とす。凡そ利己、憎惡、嫉妬より來りたる刻薄は、前にも述べたる如く、各〻多少の理由ありて、謂はゞ人道的に解釋し得べきも、此の純粹なる刻薄に至りては、其の發作に理由なく徑路なく、只管他人の苦痛他人の困難を快とし、而も其人と何等の關係あるにあらざるなり。此の種の瑕疵は其の原因到底解すべからず。或は之れを同情の缺乏に歸するものあるも、此の缺乏ある人は單に感覺痴鈍の者たるに過ぎず、されば此の消極的原因の外、尙ほ他に一種の積極的原因の加はるありて、此の瑕疵を釀成するや疑ひなきものなり。然れどもそは果して何

物なるや未だ明かに之を知ることを得ず。純粹なる刻薄は斯の如く之を人間的性情として見ることを得ざるにより、吾人は之を人間以下の惡質とし、魔界に屬するものとして放任せんのみ。唯だ此現象の多からざるは人世の幸福と云ふべきなり。

純然たる刻薄は殘忍の性を帶び、兒童によりては別に動物虐待となりて現はる。此の事は後章に說く所あるを以て、讀者は須らく之を參照すべし。尙ほ純然たる刻薄を矯正する道は教育上殆んど全く之なきものゝ如し。或は其の觀念と感情の方向を他事に移らしめ以て矯正の策を講ずべしとなすものあれども、こは殆んど功を奏したることなし。且つ此の瑕疵は年齡の長ずると共に消滅することなく、寧ろ增加する傾きあるを以て、兒童の諸缺點を論ずるに當り、吾人は之のみに對して全く對症の良法を發見する能はず、筆を投じて應に其の爲す所を知らざらんとす。

第二十六　無害の動物を嫌惡する習慣を養成する方法

教育の過誤より蝦蟇、蜘蛛、蜥蜴、蛇の如き動物を嫌惡するものゝ誤想を出づることゝ而して童兒の殺害虐待を待つにあり。

秘訣　無害の動物を強ひて有害なりと思惟せしめよ

熊雄の父は一日捕鼠器を仕掛けて置いた。熊雄は之を見て、

熊　阿父さん、何故鼠を捕るのです？

父　阿父さんは鼠が大嫌ひだから捕るのだ。

熊雄は翌朝起きるや否や捕鼠器を改めた。然るに果して一疋の大鼠が取れて居た。熊雄は大悅びで母親に告げたが、母親は、

母　鼠には非常な毒があるから、決して手を觸れてはなりません。一寸觸ると御前の體中に毒が廻つて死んで仕舞ひますよ。

熊雄は之れを聞いて非常に驚いた。此時以來彼は鼠を見ると身の毛を竦てゝ毒蛇の如く恐れ戰慄いた。彼は全く鼠に對して一種の恐怖心を懷いたのであつた。彼は成人して後も、此觀念を脫却する事が出來ない。鼠を見れば十歩も先から逃

や以種復當爲し すつすとし 種屬人侮之逐以己足は欲人少き
て之のの的なの 族れる類す族れる思たなのてしなる自て驅しなるに同とな惟り爲行正報一な
に其如るとの買滿自て驅しなるに同とな惟り爲行正報一な

げ去り、顏色を變へて震へ慄くのである。

熊雄は斯くして鼠を殺戮する種々の方法を講じた。而して此性質が猶ほ他に轉じて、一切無害の動物を見ても、鼠の如くに恐るゝに至つた。彼は一個の臆病なる人間となり終つたのである。恐るべきは鼠でなく、實に父母其人の敎育である。

第二十七　無趣味なる人物を養成する方法

秘訣　兒童が天然の美を樂まんとする時之れを制止せよ

道之助は繁華なる都會の眞中に住まつて居るから、殆んど天然の美觀に接する機會がない。自家には勿論庭園の設もなく、毎日烟突から立ち登る煙と、己れの頭上に一面の靑空が廣がつて居るのを見るのみである。

されば道之助が父と野外に散策を試みる時は、彼の目に映ずるもの悉く珍しく、

於て動物に必ずを虐待せるやのせをも容疑たるひろれ

野に咲く一輪の花も、露にすだく一疋の蟲も、彼には無上の快感を與へるのである。天を翔ける鳥の如きは、彼の目には恰も天使の飛び交ふ戲れかとも思はれるのであらう。彼は思はず、

阿父さん、なんと奇麗な花ではありませんか。あの樹の枝に止まつて居る鳥の名はなんと云ふのでせう。此の虫はなんと……あれ、美しい蝶々が……

と、一々父に話掛けるのであるが、父は冷淡に、

野の花や、樹の上の鳥を見て、何が嬉しいのだ。

と、道之助の問に對しては一つも答を與へない。

道之助は或時大きな芋蟲を見付けて驚いた。彼は一目散に父の許に駈け付け、

阿父さん、こんな珍らしい虫を見付けました。之れは何と云ふ虫でせう？

父は額に皺を寄せて、

何だ、芋蟲等を持つて來てどうするのだ。直ぐに蹈潰して仕舞へ。

斯くて道之助の天然界に對する知識は、其門に入らんとして閉鎖せられたのである。其と同時に天然界に對する彼の興味も窒息されて仕舞つたのである。

道之助が好奇心に驅られて、路傍の草花や鳥獸を眺めて居ると、父は、

早く歩かないか。そうぐづ〳〵して居ると、今度はもう散歩に伴れて來ないぞ。

道之助は慌てゝ小走りに父に追ひ付く。然し花や鳥に注意を取られて、幾許もなく復た數歩後れる。ある田畦道に來た時、道之助は闘らずも一つの蛙を見付けた。彼は立止まつてそれを凝視めて居た。父は遂に焦燥つて、道之助の手を執り、強く之れを拉りながら、

道之助、そんなにぐづ〳〵して居ると夜になりますぞ。夜になれば茶店に行つて休む事も、御前に菓子を買つて與る事も出來ませんぞ。

斯くて道之助の天然界に對する高尚なる趣味は、憐れ一片の菓子を以て抑壓せられんとするのである。無趣味なる人は造物者の巧緻なる天工を以て、粗惡なる一片の菓子にも如かずとなすのである。

道之助は成長した。然し一種の無感覺なる人物となつた。如何に美はしい山河の壯觀も、如何に馥郁たる花園の薫も、彼の耳目には最早少しも感じない。告天子が天然の諧調に絶妙の音樂を奏するも、菫に戯むるゝ一双の蝴蝶の舞も、彼には一杯の粗酒よりも愉快を與へない。彼の談話は頗る殺風景で、實に俗臭紛々たるものである。

三河屋の酒は佳いな、……一杯飲みたいものだ……夜前は花で十圓負けたが、今夜は取り返しを付けにやならぬ……

酒と賭博、之れが道之助には最も愉快を與へるのである。然し彼も一生涯を通

じて、一回は天然の美を感じた事があつた。其は中秋明月の天に冲せんとする時であつた。彼は思はず叫んだ。

月の上るのは奇麗なものだ、月の大さは酒樽位ある樣だが、酒樽一つ三斗五升入りとして、昨今の相場が二十圓……

と、あゝ酒樽、之れが月に對する唯一の感慨である。如何に憐むべき人間ではあるまいか。

第二十八　臆病者を養成する方法

臆病なる者に

其一

秘訣　兒童に怪談を聞かしめ怪力亂神を信ぜしめよ

某は夕餉が濟むと、必ず子供等を集めて、物語をなすを例として居た。子供等

對しては徐ろに親なる切待遇なるを加へて及び精神的安堵せしむる最上の症法を對する

も大に之れを喜び、常に父を圍繞して、其談話を聽聞した。然るに父の談話は專ら山賊、巨盜、怪魔、亡魂、幽靈等に關するものであつた。蓋し斯かる談話は子供等が最も好んで耳を傾くるからである。例へば彼處の銀杏の精が女に化けた、それで今でも化銀杏の名があるのだ。某所の古池に溺死者があつて、其亡靈が夜な夜な岸邊の柳の下に佇んで居る。彼の古井戸は地獄の三途の川に續いて居て、毎年一度づゝ亡者が出て來るのだ。と、かう云ふ類のもので、子供等は之れによつて早くから妖怪、亡靈、怪力、亂神等を信ずる事になつた。其結果として子供等は夜になると、非常に恐怖心を起し、闇い處には一歩も進み入る事が出來ないのみならず、獨りで寢所に入る事すら覺束ない樣になつた。子供等は暗夜父と外出する時は、途上の樹木を妖怪變化と思惟し、流星を見て死人の靈魂と信じ、戰々競々として父の袖を以て面を掩ふのである、一人の兒は夜半鮮かなる鐘の響を聞

いて、怪魔の哭聲であると思ひ、恐怖の餘り腦膜炎を起して、遂に死亡したとの事である。

其二

秘訣　雷電の恐るべきを知らしめよ

宇宙間には人智を以て測り得べからざる現象が隨分多くある。其を神の所業として尊敬するのは元より惡い事ではないが、人間の智力の範圍内にある現象を捉へて、而も研究せずに之を恐るべしとするは、萬物の靈長たる人間の擧動としては寧ろ耻づべき事である。

某は不幸にして此無識なる人間の一人であつた。彼は雷鳴を聞くと、顏色を變じて家の中へ逃込むのである。而して雷電が激しくなると、地に跪き天を仰ぎ、手を合せて神を祈念する。無論彼は雷の神が其家に來訪して災害を加へざる樣に祈るのである。

某の子供等も初めは紫電の美觀を喜び、雷鳴の壯絶なるを快として居たが、父の此行爲を見て、漸く恐怖の念を懷くに至り、遂には父と共に手を合せて戰慄する仲間となつた。彼等は年を重ぬるに隨つて、益々怯懦に陷り、臆病者となり、雷鳴を聞けば殆んど死するが如き苦痛を感ずるに至つた。世の父母は之れを見て、果して敬神の念深き兒童として賞揚するや否や。

其三

秘訣　兒童に死の最も恐るべき事を知らしめよ

西洋の或る國に、頗る熱心なる基督教信者があつたが、此人は奇妙にも、死と云ふ事に對して二樣の解釋を懷いて居た。此人が寺院で說教を聞いて居る時は、死は善人に取つて少しも恐るべきものでない、死は天國へ歸るのであるから、寧

ろ悅ぶべきものであると思うて居た。然し此人が家に歸ると、前とは全く反對の見解を下すのである。彼は居ても立つても死の恐ろしさに堪へ得ない。或時彼は其友人の死去を聞いて顏色蒼然、恰も死神が自己に迫り來つたかの如くに戰慄した。

一朝彼が病氣に罹る時は、殆んど失神者の如く、茫然として爲す所を知らない。而して死に對する彼の極端なる恐怖心は、忽ちにして其兒童に波及し、兒童は死を恐るゝこと父よりも更に一層甚しくなつた。

或時子供の一人が輕症の胃加答留に罹つた。父と他の子供等は死神の必然來訪せん事を恐れ、聲を放つて啼泣した。

胃加答留は元より死病ではないが、周圍の恐怖斯の如く甚だしき爲め、病者は死を確信して、遂に神經過敏となり、其結果實際死するに至つたとの事である。

第二十九　累弱なる身體を作る方法

秘訣　兒童の健康を害し生命を危うする手段を講ぜよ

之れは西洋の話であるが、或る金滿家の家に、去年生れたメリーといふ愛子があつた。彼の母親は非常に子煩惱で、而も非常なる綿密家である故、精細なる注意を以て其兒の養育に努めた。母親の考ふる所によれば、兒童は極めて皮膚が薄い故、外氣に感じ易い。故になるべく冷えぬやうにするのが肝要であると。されば——メリーは常に五枚も六枚も衣服を重ね、殆んど手足を自由に動かす事すら出來ない程である。又室內には、冬は勿論、春でも秋でも始終煖爐の火を絕やした事がない。而も其溫度は頗る高くして、普通の人には頭痛や眩暈がする程であつた。

——メリーは此暖かい部室に起居し、九月から六月までは煖爐焚詰めの中に居るので

ある。然るに母親は煖爐のみでは未だ不十分だとて、更に湯婆を拵へて子供の臥床に入れる。其が爲めメリーは常に全身汗を浴びて、何時も浴後の體裁であつた。母親は此容子を見て、

此位に注意して置けば先づ大丈夫だ。メリーは屹度健全に成長するであらう。

と、然るに子供の容子は次第々々に變つて來て、衰弱の徵候は疑もなく表はれて來た。初め林檎の樣に紅を帶びて居た彼の豐かなる双頰も、漸く青褪めて來、兩腕はだらりと力なく垂下し、頭は俯いて元氣なく、眼睛は曇よりとして光りを失つて仕舞つた。

或朝母親がメリーを抱いて窓の邊に佇立して居た時、圖らずも窓の戸が開いて、冷風が颯と襟元から吹き込んだ。メリーは嘘をして、ブル〳〵と震へ戰いたが、其より俄に容態が惡くなつて來た。而して二三日の後、眼を泣き膨らした母親は、哀れなるメリーの冷かなる遺骸を抱いて悶絶したとの事である。要するに此母は、劍を弄するものは劍に斃れ、愛に溺るゝものは愛に死すとの諺に漏れなかつたのである。嗚呼室咲きの花は直ちに凋落するといふが、今やメリーの上に實現されたのである。

＊　＊　＊　＊　＊

隣家のメリーで懲りたヂアツクの母親は、全く之れと正反對の方法を取つて其子を養育した。兒童は成るべく早くより耐寒の習慣を作る必要があるといふ意見で、ヂアツクは嚴寒中と雖も數時間屋外に放置された。加之時々冷水を頭上から浴びせかけられた。

ヂアツクは斯の如き方法によつて耐寒の練習をなしたのであるが、兩親は煖爐を盛んに焚いて、暖かなる室内に起居して居た。ヂアツクも時々此室に來る事が

あるが、室外の非常なる寒氣から俄に室内の春の如き暖氣に移る故、ヂアックの額には玉の如き汗が流れて來る。

或時母親はヂアックの汗を見て、早速其襯衣を脱がせ、之を冷水に浴せしめ樣とした。ヂアックの體は氷の如き水の中に入るや否や、アッと一聲、目は釣り上がつて手足は痙攣し、魂魄遂に白玉樓上に去つて復た歸り來らなかつたのである。

＊　＊　＊　＊

前後左右から支柱を施して、辛うじて顚倒を免れた樹木は根が張つて居ない。故に支柱を取り去つた時、一夜風伯の襲ふ所となれば、見事打ち倒されて仕舞ふのである。之れに反して高山の巖頭に成長した樹木は、激しい風を眞面に受けて、然も千年變らざる綠の色に誇つて居る。其は堅い根が磐石の間に食ひ込んで張り詰めて居るからである。人間も決して此道理には漏れない。記者は其實例を擧ぐるに些の困難をも感ぜぬのである。

遠藤君と云うて有名な子煩惱家があつたが、其一子繁松こそ眞に能く前述の實例に當て篏つて居る。遠藤君嘗て謂ひけらく、萬金の財寶も、なんで子供の愛らしさに代へる事が出來やう。子供は天地の精華で、子供の生命こそ實に我が生命の生命であると。氏は繁松の食物などに注意する事非常である。無論害になりそうな食物は與へた事がなく、滋養になるものでも決して腹一杯に食はせる事はない。若し子供が飲食物なくして活きて行く事が出來るならば、氏は全く飲食物を廢めて仕舞つたのであらう。

おい阿京や、若し御前が子供に害になる食物でもやれば離緣しますよ。御前はどうも子供が嫌ひで不可い。繁松は御前にも子です。自分の子ならもう少し注意するが宜からう。假令ひ滋養になるものでも、多量に與へてはなりません。

況て菓子や果物などを食べさしては可けません。菓子や果物には兎角黴菌が居て、動もすると結核だの赤痢だのを惹起す患があります。又牛乳も牛肉も小兒には消化し切れません。その爲めに下痢や胃病を起す事が度々あるのです。又魚肉も條虫を生ずる虞がある。野菜には不消化の物が多い。以後繁松の食物には、鷄卵一個と、よく煮た米の粥と、極く柔かな鷄肉少量を用ひる事にしなさい。又水などを飲ますと腹痛を起すから、生暖かい葡萄酒を匕に一杯づゝ與る樣にしなさい。若し御前が命令通りにしなければ離縁しますぞ。

細君阿京は命令通りにした。然し繁松の發育は思はしくない。十二歳になつても八歳位の體格で、顏色は蒼然として生色がない。他の兒童等が愉快氣に飛廻つて遊び戯むれて居るのを見ると、繁松も其仲間に這入るが、十分も經たない中に疲勞して、家に歸つて寢ると云ふ始末である。或日の事繁松は喉が乾いたとて、水を稍々多量に飲んだが、其が原因となつて遂に病氣に罹り、數月を經るも癒えない。醫者は治癒の見込がないと宣言した。遠藤君果して如何の感慨かある。人間も樹木も敢て異らないと云ふは卽ち玆である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

天にも地にも唯だ賴むべきは一子五郎である。吾を愛し吾を護りし亡夫の紀念は、卽ち此愛すべき一子五郎の外に何もない。五郎の成長は吾の成長である。五郎の名譽は吾の名譽である。否、亡夫其人の名譽である。吾は五郎を健全に養育する義務がある。先日家兄が來訪した時、五郎の健康は御前の幸福であると云はれたが、全く其通りである。

噫是れは夫に別れた浪子の述懷であるが、此浪子の獨語を聞いては、何人も一滴の涙を惜しむまい。浪子の述懷は浪子の貞操を現はして居る。浪子の述懷は眞